

仙台市文化財調査報告書第120集

谷津A・B遺跡 芦見遺跡

— 錦ヶ丘ニュータウン関連遺跡発掘調査報告書 —

仙台市宮城地区

1988年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第120集

谷津A・B遺跡 芦見遺跡

— 錦ヶ丘ニュータウン関連遺跡発掘調査報告書 —

仙台市宮城地区

1988年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市は今年度、政令指定都市への移行を目標として、広域都市圏を形成していた泉市・宮城町・秋保町の一市二町との合併を推進いたしました。合併によって生まれた新仙台市は、面積でこれまでの約3倍という広大な市域となりました。これにあわせて、市内に登録されている遺跡数はおよそ700ヶ所余りとなり、文化財に対してこれまで以上にきめ細かな対応がもとめられるようになっていこうかと思われまます。

今回報告いたします3遺跡は、旧宮城町教育委員会において発掘調査が実施されたものであります。

宮城地域は広瀬川の上流に拓がる、豊かな自然にめぐまれた地域であり、田植踊りや剣舞、鹿踊などの民俗芸能をはじめとして、数多くの文化財がのこされているところでもあります。

こうした豊かな文化遺産を守りながら、これからの新しい「まちづくり」のなかに、どう活かしていくべきか、市民の皆様とともに考えていく必要が感じられます。

これからも文化財保護への深いご理解とご協力をお願いするとともに、調査にたずさわっていただいた多くの方々に対しまして、心より御礼申しあげる次第であります。

1988年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

例 言

1. 本報告書は、昭和60年度に旧宮城町教育委員会が実施した、山万株式会社による錦ヶ丘ニュータウン造成工事に伴う谷津A遺跡・谷津B遺跡・芦見遺跡の発掘調査報告書である。
2. 報告書作成にあたっての遺物整理は原河英二・工藤信一郎が担当し、石器実測については吉岡恭平の協力をえた。
3. 本文の執筆・編集は工藤が行なったが、(3)芦見遺跡IV章2石器・石製品は吉岡による。
4. 本報告書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1:25,000「仙台市西北部・熊ヶ根」の一部及び、1:50,000「宮城町管内図」の一部を使用している。
5. 実測図中の水系高は標高で示している。
6. 実測図中の方位は磁北に統一してある。仙台市において磁北は真北に対して西偏7°20'である。
7. 本遺跡の調査・整理に関する記録・出土遺物は、仙台市教育委員会文化財課で保管しているので活用されたい。

調 査 要 項

1. 遺 跡 の 名 称 谷津A遺跡・谷津B遺跡・芦見遺跡
2. 遺 跡 所 在 地 谷津A・B遺跡：仙台市上愛子字谷津18番地他
芦 見 遺 跡：仙台市上愛子字峯岸地内
3. 調 査 主 体 宮城町教育委員会
4. 調 査 担 当 宮城町教育委員会社会教育課
主事 原河英二 主事補 工藤信一郎
5. 調 査 期 間 1985年10月4日～12月2日
6. 調査対象面積 谷津A遺跡 約4,000m² 谷津B遺跡 約1,000m² 芦見遺跡 約3,000m²
7. 発掘調査面積 約250m² 約8m² 約900m²
8. 調 査 協 力 山万株式会社
9. 調 査 参 加 者 山口宗一 阿部幸彦 横山秀俊 (以上山万株式会社)
佐藤きよ子 佐藤はな 佐藤ケサノ 戸内りゑ 戸内きわ子
10. 整 理 参 加 者 鈴木富江 佐藤きみ 太田広子 白井まき子 松野由美 松本一博
佐藤美紀 相沢きみい 柴田くに子 庄子笑美子 戸内敬子 和田久江
小田部三起子

本文目次

I. 遺跡の位置と環境	1
1. 位置と立地	1
2. 周辺の遺跡	1
II. 調査に至る経過	4
III. 調査概要	5
(1) 谷津A遺跡	7
I. 遺跡の立地	9
II. 調査の方法と概要	10
1. 調査の方法	10
2. 調査概要	10
III. 基本層位	11
IV. 発見された遺構	12
V. 出土遺物	14
1. 土器	14
VI. まとめ	16
(2) 谷津B遺跡	23
I. 遺跡の立地	25
II. 調査の方法と結果	25
1. 調査の方法	25
2. 調査結果	26
III. 出土遺物	26
1. 羽口	26
2. 鉄滓	27
IV. 宮城地区内の製鉄遺跡の分布	27
V. まとめ	30

(3) 芦見遺跡	35
I. 遺跡の立地	37
II. 調査の方法と結果	37
1. 調査の方法	37
2. 調査結果	38
III. 遺物包含層	38
IV. 出土遺物	39
1. 土器	39
2. 石器	53
V. まとめ	54

挿図・表目次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 宮城地区内で発掘調査された遺跡	5
第3図 錦ヶ丘ニュータウン関連遺跡位置図	6
表 1 遺跡地名表	3
表 2 宮城地区発掘調査成果一覧	4

(1) 谷津A遺跡

第1図 遺跡地形図	9
第2図 調査トレンチ配置図及び遺構位置図	10
第3図 調査区基本層序（試掘トレンチセクション図）	11
第4図 1号土坑平面図	12
第5図 2号土坑平面図	13
第6図 溝状遺構平面図	14
第7図 出土遺物・土器	15

(2) 谷津B遺跡

第1図 遺跡地形図	25
第2図 出土遺物・羽口	26
第3図 宮城地区内の製鉄遺跡分布図	28

第4図 黒森山遺跡遺構配置図	29
----------------	----

(3) 芦見遺跡

第1図 遺跡地形図	37
第2図 調査区平面図	38
第3図 遺物包含層セクション図	39
第4図 出土遺物・実測土器	45
第5図 出土遺物・拓本土器(1)	46
第6図 出土遺物・拓本土器(2)	47
第7図 出土遺物・拓本土器(3)	48
第8図 出土遺物・拓本土器(4)	49
第9図 出土遺物・拓本土器(5)	50
第10図 出土遺物・拓本土器(6)	51
第11図 出土遺物・拓本土器(7)	52
第12図 出土遺物・石器(1)	55
第13図 出土遺物・石器(2)	56
第14図 出土遺物・石器(3)	57
第15図 出土遺物・石器(4)	58
表 1 石器・石製品観察表	54

写真図版目次

(1) 谷津A遺跡

写真1 遺跡遠景	18
写真2 G-2トレンチ	18
写真3 G-5トレンチ	18
写真4 I-4区調査状況	19
写真5 2号土坑	19
写真6 I-4区遺物出土状態	19
写真7 1号土坑	20
写真8 溝状遺構検出状況	20
写真9 溝状遺構完掘状況	20

写真10 出土遺物・土器	21
--------------	----

(2) 谷津B遺跡

写真1 出土遺物・羽口・鉄滓	32
写真2 黒森山遺跡調査区	33
写真3 黒森山遺跡1号炉検出状況	33
写真4 黒森山遺跡1号炉完掘状況	33
写真5 黒森山遺跡出土遺物・羽口	34

(3) 芦見遺跡

写真1 調査区伐採状況(東から)	62
写真2 遺跡遠景	62
写真3 作業風景	62
写真4 遺物出土状況(包含層上面)	63
写真5 遺物出土状況(包含層中・東から)	63
写真6 遺物出土状況(包含層中・北から)	63
写真7 遺物出土状態	64
写真8 石棒出土状態	64
写真9 遺物包含層完掘状況	64
写真10 出土遺物・復元土器	65
写真11 出土遺物・拓本土器(1)	66
写真12 出土遺物・拓本土器(2)	67
写真13 出土遺物・拓本土器(3)	68
写真14 出土遺物・拓本土器(4)	69
写真15 出土遺物・拓本土器(5)	70
写真16 出土遺物・拓本土器(6)	71
写真17 出土遺物・拓本土器(7)	72
写真18 出土遺物・石器(1)	73
写真19 出土遺物・石器(2)	74

I. 遺跡の位置と環境

1. 位置と立地

谷津A・谷津B・芦見の3遺跡は、仙台市上愛子字谷津・字峯岸に位置している（第1図）。

JR仙山線愛子駅の約2km南方、仙台市宮城総合支所（旧宮城町役場）の南側にあたる。

現状は、谷津A遺跡においては休耕田で一部が畑地となっていた。谷津B遺跡・芦見遺跡においては山林となっていた。

宮城地区（旧宮城町）は、仙台市内の北西に位置し、北側で泉地区（旧泉市）、南側で秋保地区（旧秋保町）、西側では山形県と境を接する東西に長い地域である。地域のほとんどは山地及び丘陵で占められており、西側の奥羽山脈から脈生した丘陵が東西に発達している。宮城地区の北側には七北田・国見丘陵が、南側には青葉山・蕃山丘陵が走り、それぞれ東にのびている。標高はともに200m前後である。

遺跡の立地する愛子地区は、この南北2つの丘陵からはりだす小丘陵によって盆地状を呈しており、愛子盆地とよばれている。盆地のほぼ中央を、奥羽山脈を水源とする広瀬川が丘陵を開析しながら東流し、数段の河岸段丘を形成している。この間広瀬川には、熊ヶ根付近で青下川と大倉川が、落合付近で芋沢川が合流し、さらに日辺付近で名取川と合流して太平洋に注いでいる。

錦ヶ丘ニュータウン関連の3遺跡は、この愛子盆地の南、蕃山丘陵西端の斉勝沼・月山池を水源とする斉勝川の支流、谷津川沿いの谷底地に位置している。

遺跡内の標高は130m程度である。

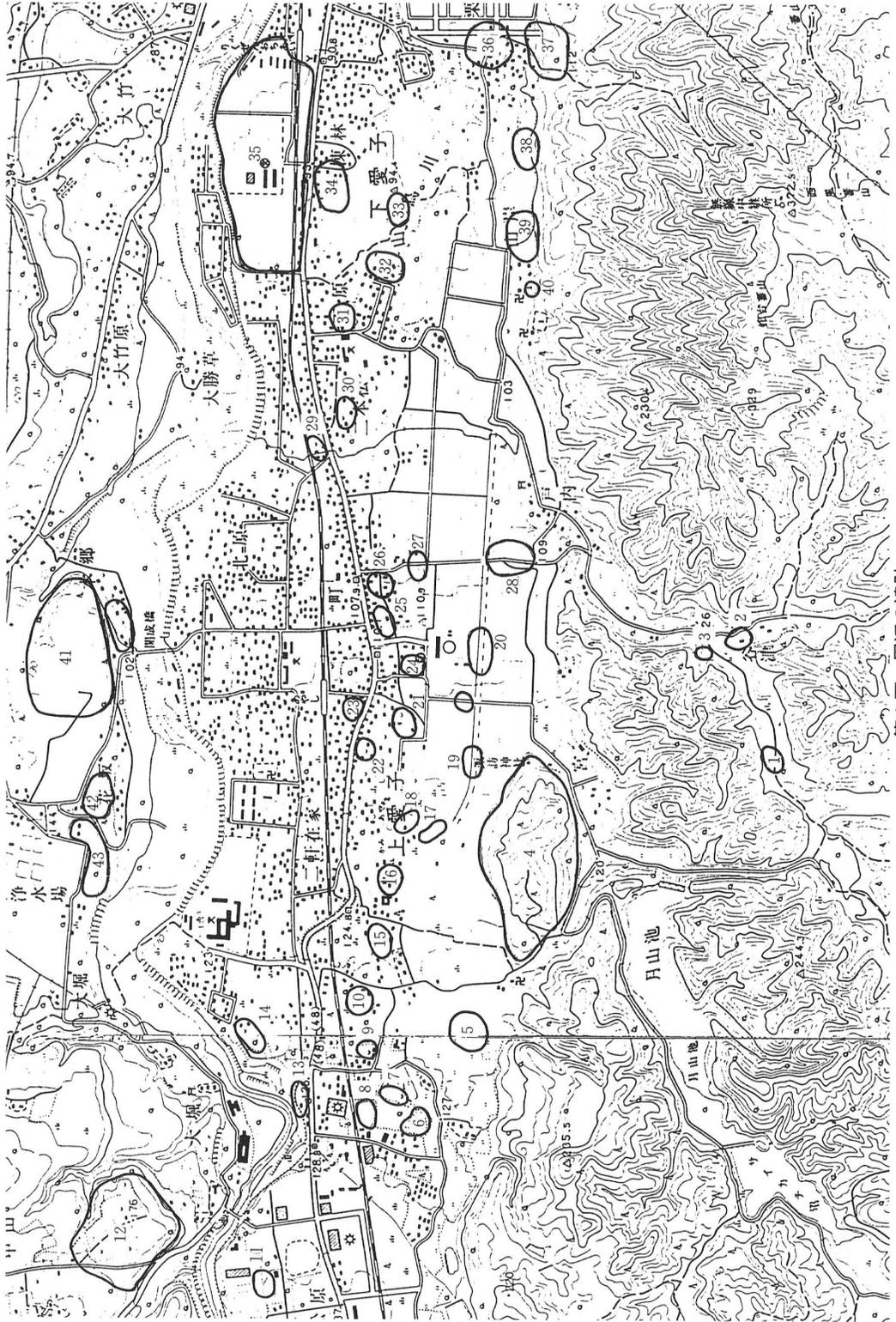
2. 周辺の遺跡

現在宮城地区では134の遺跡が確認されている。これらの遺跡の多くは、愛子地区内の河岸段丘や周辺の丘陵・台地上に位置している。錦ヶ丘ニュータウン関連の3遺跡の周辺には44ヶ所の分布が認められている（第1図）。

宮城地区の遺跡について時期別にみると、縄文時代の遺跡の多くは、広瀬川上流域の作並・熊ヶ根・大倉・芋沢といった西部地域の丘陵上や段丘上に数多く分布している。

今のところ地区内でもっとも古い時期の遺跡と考えられるのは、芋沢地区の蒲沢山遺跡で、羽状縄文系土器群に伴う竪穴住居跡が確認されたほか、条痕文系土器群が出土している（宮城町教委：1983一部概報済）。

谷津A・芦見遺跡と同時代と考えられる縄文時代の遺跡としては、観音堂遺跡(20)・一本杉遺跡(35)・北原街道B遺跡(14)などがある。



第1図 周辺の遺跡

このうち一本杉遺跡は、県立宮城広瀬高校建設に伴う調査において、縄文時代の竪穴住居跡1軒と土坑・埋設土器遺構が確認されたほか、縄文時代中期末葉～後期初頭の土器が出土している（宮城県教委：1982）。

また観音堂遺跡は、愛子バイパス建設に伴う調査において、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡5軒のほか、平安時代の竪穴住居跡1軒が確認されている（宮城県教委：1986）。

弥生時代の遺跡は、今のところ今回調査を行なった芦見遺跡と蒲沢山遺跡から土器片が出土しているのみで、遺構等は確認されていない。

奈良時代から平安時代にかけての遺跡は、広瀬川中流域の愛子を中心とする東部地域に多く分布する傾向がみられる。この時期の遺跡としては、一本杉遺跡(35)・平治遺跡(6)・二本松A遺跡(30)・郷六地区の沼田遺跡等が知られている。

このうち一本杉遺跡では、NTTラインマンセンター建設に伴う調査において、平安時代の竪穴住居跡5軒が確認されている（宮城町教委：1983末報告）。また、県営住宅建設に伴う調査においても、同時期の竪穴住居跡2軒が確認されている（宮城県教委：1985）。

中世から近世にかけては城館址が数多く分布しており、愛子地区においても、中世の宮城地区を支配していた国分氏に関係すると思われる御殿館跡(4)、本郷館跡(41)・南館跡(28)・郷六氏の居城といわれる郷六城跡などがある。

No	遺跡番号	遺跡名	立地	時代	No	遺跡番号	遺跡名	立地	時代
1	21148	芦見遺跡	丘陵麓	縄文	23	21083	樋田A遺跡	段丘	縄文、古代
2	21146	谷津A遺跡	谷底平野	縄文	24	21084	上町A遺跡	段丘	古代
3	21147	谷津B遺跡	丘陵麓	中世、近世	25	21085	上町B遺跡	段丘	古代
4	21031	御殿館跡	丘陵	中世	26	21030	補陀寺跡	段丘	近世
5	21134	二ツ岩遺跡	段丘	縄文晩	27	21086	観音A遺跡	段丘	古代
6	21075	平治遺跡	段丘	縄文、古代	28	21091	南館跡	段丘	中世
7	21076	車B遺跡	段丘	縄文、古代	29	21043	想海塚跡	段丘	中世
8	21074	車A遺跡	段丘	古代	30	21087	二本松A遺跡	段丘	縄文、古代
9	21077	雷神A遺跡	段丘	古代	31	21089	棟林C遺跡	段丘	縄文、古代
10	21078	雷神B遺跡	段丘	古代	32	21088	棟林B遺跡	段丘	古代
11	21026	松原遺跡	段丘	縄文	33	21097	五輪塔遺跡	段丘	縄文、古代
12	21024	下野遺跡	段丘	縄文晩	34	21004	棟林A遺跡	段丘	縄文
13	21027	北原街道遺跡	段丘	縄文前	35	21133	一本杉遺跡	段丘	縄文中・後、平安
14	21144	北原街道B遺跡	段丘	縄文前・中	36	21096	栗生遺跡	段丘	古代
15	21079	堰内遺跡	段丘	縄文、古代	37	21029	西館跡	丘陵	中世、近世
16	21140	樋田B遺跡	段丘	縄文	38	21095	窪遺跡	丘陵麓	古代
17	21139	蛇台原C遺跡	段丘	縄文	39	21094	館遺跡	丘陵端	古代
18	21080	蛇台原A遺跡	段丘	古代	40	21061	弥勒寺元亨碑		中世
19	21138	新宮前遺跡	段丘	古代	41	21039	本郷館跡	段丘	中世
20	21137	観音堂遺跡	段丘	縄文中、平安	42	21003	花坂遺跡	段丘	縄文中
21	21081	榎遺跡	段丘	古代	43	21025	中原遺跡	段丘	縄文
22	21082	蛇台原B遺跡	段丘	縄文、古代					

表1 遺跡地名表

このほか、鎌倉から室町期に築壇された宗教的行為に伴う遺構と考えられる想海塚跡(29)がある（宮城町教委・志間泰治：1973）。

また、宮城地区内に遺る板碑としては三番目に古いものである、弥勒寺境内の元亨の碑(40)などがある。

近世にはいと伊達家に関係する遺跡が多くなるが、なかでも伊達綱村の発意による吉成地区の臨濟院寺跡や、政宗の長女五郎八姫の御仮御殿と伝えられる西館跡(37)があるほか、愛子の地名の由来になった子愛観音をまつるとの「安永風土記」の記載がある補陀寺跡(26)がある。

臨濟院寺跡は、区画整理事業に伴う調査において、本堂跡や鐘楼跡と考えられる石垣や基壇・庭園・井戸跡などが確認されている。（宮城町教委：1985末報告）

西館跡は、愛子バイパス建設工事に伴う調査において、出入口部通路部分の2段構成の石垣が確認されている。（宮城県教委：1987）

II. 調査に至る経過

旧宮城町は特に東部地域において年々都市化が進み、大規模な宅地開発事業がつぎつぎと実施されていた。

昭和57年1月山万株式会社による宅地造成事業が計画され、その後造成対象とされた旧宮城

No	遺跡名	調査年	調査担当	検出遺構	出土遺物	文献
1	想海塚跡	1967	宮城町教育委員会 志間泰治	三段築造の方形の塚 (鎌倉時代中期～室町時代)	北宋銭10枚（「祥符通宝」「皇宋通宝」「元宝通宝」「紹聖元宝」）	1
2	権現森山遺跡	1979	宮城県教育委員会	遺構無	剃片石器	11
3	農学寮跡遺跡 (一本杉遺跡に改称)	1981	宮城県教育委員会	竪穴住居跡2軒・埋設土器遺構 (縄文時代中期末葉～後期初頭)	縄文土器（大木10式～南境式）	10
4	一本杉A遺跡	1983	宮城県教育委員会	竪穴住居跡2軒 (平安時代)	土師器・須恵器	12
5	一本杉B遺跡	1983	宮城町教育委員会	竪穴住居跡5軒 (平安時代)	土師器・須恵器・中世陶器	7
6	蒲沢山遺跡	1982～ 1984	宮城町教育委員会	竪穴住居跡22軒・土坑群 (縄文時代前期初頭) 製鉄関連遺構(検出)	条痕文系土器・羽状縄文系土器（素山II式・上川名II式～大木1式） 縄文土器（大木2・3・5a・7a・8a・8b式期） 石器・弥生土器・鉄滓	6・7
7	臨濟院寺跡	1985	宮城町教育委員会	寺院跡 (本堂跡・鐘楼跡・庭園・池跡・ 井戸跡・排水施設)	瓦・陶磁器（17世紀古伊万里焼・相馬焼・平清水焼）	7
8	黒森山遺跡	1985	宮城町教育委員会	製鉄炉跡4基・炭焼跡 (平安時代)	羽口・鉄滓・ロクロ土師器	7
9	西館跡	1986	宮城県教育委員会	屋敷跡入口部石垣遺構	陶器（総纏部陶・美濃丸皿・志野丸皿・志野織部皿） 土師質土器 宋銭4枚（「紹聖元宝」「景德元宝」「至道元宝」「祥符通宝」）	9
10	観音堂遺跡	1986	宮城県教育委員会	竪穴住居跡5軒・炉跡・埋設土器 遺構・土坑 竪穴住居跡1軒 (平安時代)	縄文土器（大木10式） 石器 ロクロ土師器・須恵器	8
11	新宮前遺跡	1986	宮城県教育委員会	遺構無	遺物無	8

表2 宮城地区発掘調査成果一覧

町上愛子字谷津、字芦見・字峯岸地内の周知の文化財の有無について協議があった。これをうけて宮城町教育委員会では、昭和59年5月に当該事業計画地内における分布調査を行ない、谷津A・谷津B・芦見遺跡の3遺跡を発見した(第3図)。

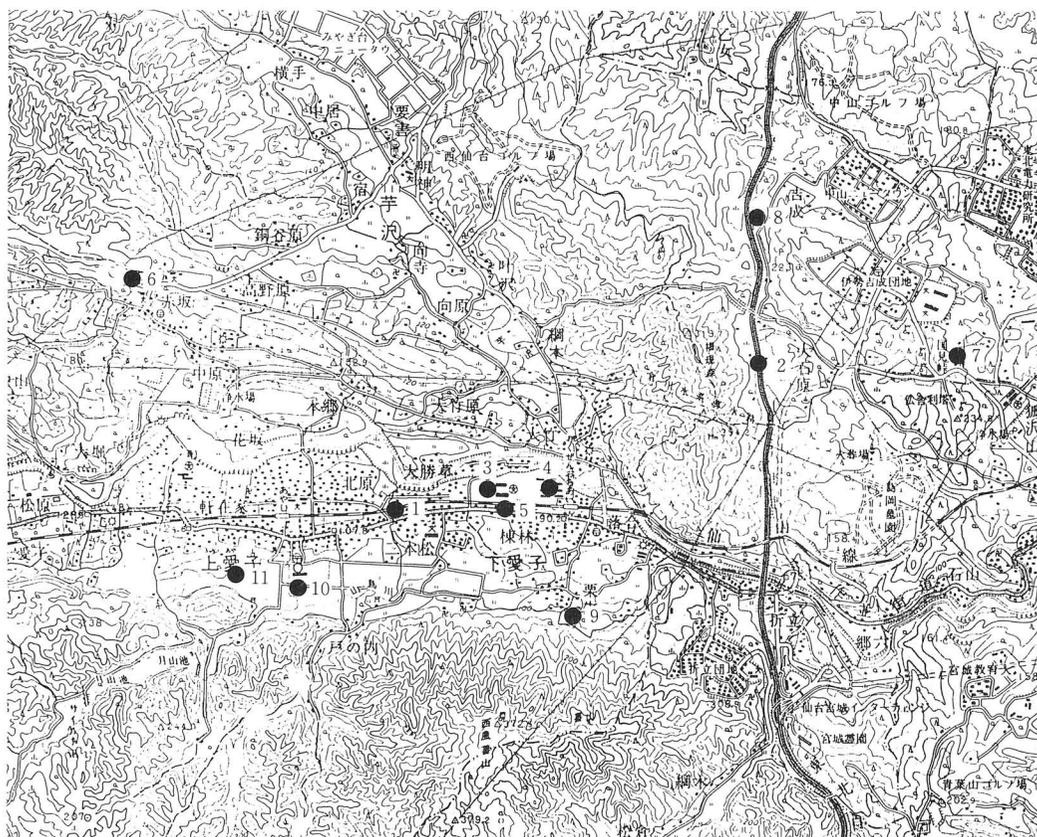
その結果を基にして町教育委員会・山万株式会社の間で協議を行なったが、昭和59年8月山万株式会社より当該事業計画地内の3遺跡の保存については、事業計画の実施上困難である旨の回答があった。

そのため町教育委員会では、記録保存を前提とする発掘調査を行なうこととして協議を行ない、昭和60年9月発掘調査委託契約を結び、同年10月調査に入り、同年12月調査を終了した。

この間、調査の実施にあたっては山万株式会社より作業員および機材の提供、また調査の前段階の伐採伐根作業等について便宜を図っていただいた。

III. 調査概要

調査は谷津A・谷津B・芦見の3遺跡を対象として、昭和60年10月4日に開始し、12月2日までの約2ヶ月間行なわれた。



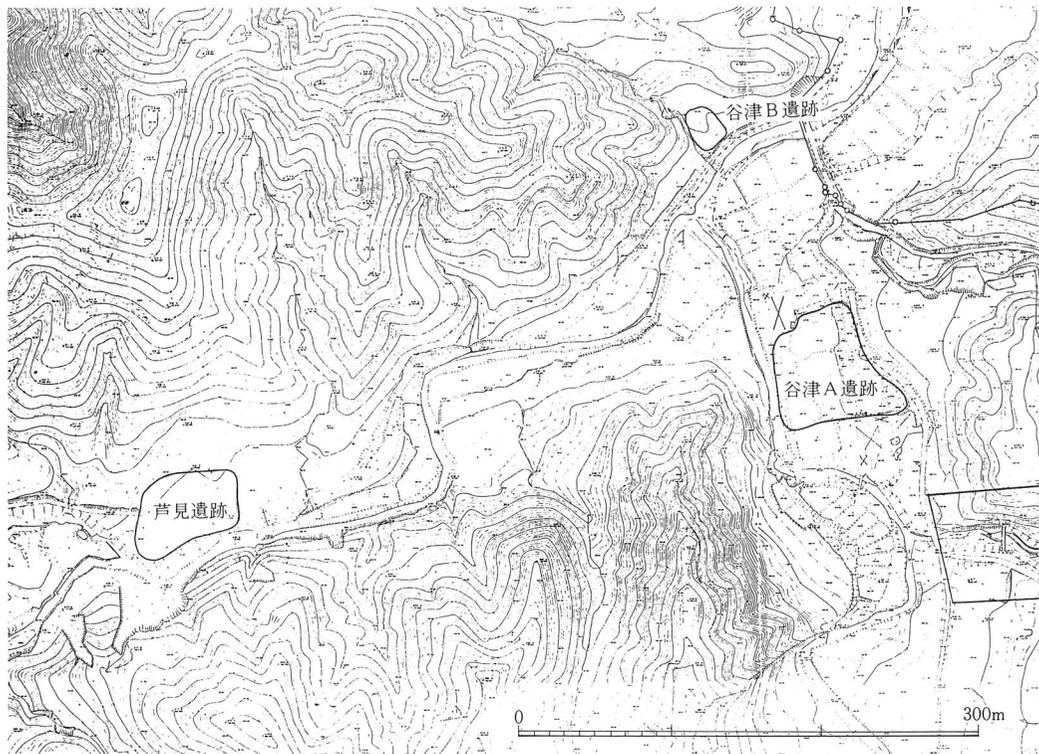
第2図 宮城地区内で発掘調査された遺跡

谷津A遺跡は、10月4日に調査に入り、10月25日に調査を終了した。調査対象面積は約4,000㎡、調査面積は約250㎡である。調査方法はトレンチ調査とし、遺物・遺構の検出されたトレンチを拡張していった。検出された遺構としては、時期不明の溝状遺構および土坑2基があるほか、縄文時代中期中葉の土器片が少量出土している。

谷津B遺跡は、調査時において主体部が天地返しをうけたことが明らかになったため、比較的自然地形をとどめていると思われる部分に、任意のテストトレンチ1本を設定して調査に入った。しかし土層状態の観察からこの地点も攪乱をうけていることが確認されたため、10月25日だけで調査を終了した。

芦見遺跡は、10月26日に調査に入り、12月2日に調査を終了した。調査対象面積は約3,000㎡、調査面積は約900㎡である。表採調査において鉄滓や焼土が確認されていたが、谷津B遺跡同様、攪乱や盛土により当初主体と考えた部分の調査が不可能となっていた。このため調査予定地内の南側の平坦面に調査区を設定して調査に入った。

検出された遺構はなかったが、調査区北西側において、縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭の遺物包含層が確認された。



第3図 錦ヶ丘ニュータウン関連遺跡位置図

(1) 谷津A遺跡

調 査 要 項

1. 遺 跡 記 号 宮城県遺跡地名表番号 21146
2. 遺跡の所在地 仙台市上愛子字谷津18番地
3. 調 査 期 間 1985年10月4日～10月25日
4. 調査対象面積 約4,000 m²
5. 調 査 面 積 約250 m²

目 次

I. 遺 跡 の 立 地	9
II. 調査の方法と概要	10
1. 調査の方法	10
2. 調査概要	10
III. 基 本 層 位	11
IV. 発見された遺構	12
V. 出 土 遺 物	14
1. 土 器	14
VI. ま と め	16

挿図・表目次

第1図 遺跡地形図	9
第2図 調査トレンチ配置図 及び遺構位置図	10
第3図 調査区基本層序 (試掘トレンチセクション図)	11
第4図 1号土坑平面図	12
第5図 2号土坑平面図	13
第6図 溝状遺構平面図	14
第7図 出土遺物・土器	15

写真図版目次

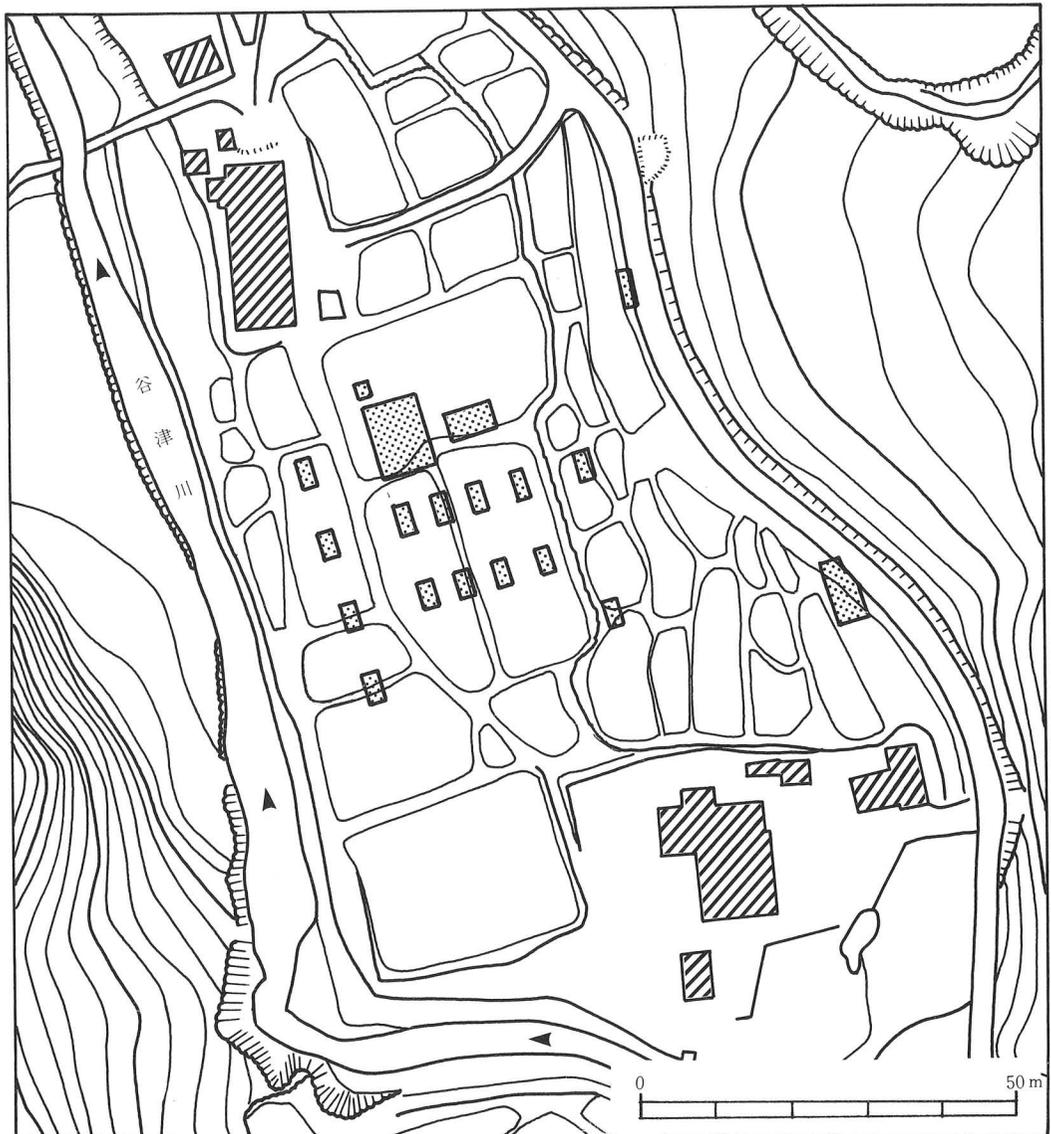
写真1 遺跡遠景	18
写真2 G-2トレンチ	18
写真3 G-5トレンチ	18
写真4 I-4区調査状況	19
写真5 2号土坑	19
写真6 I-4区遺物出土状態	19
写真7 1号土坑	20
写真8 溝状遺構検出状況	20
写真9 溝状遺構完掘状況	20
写真10 出土遺物・土器	21

I. 遺跡の立地

谷津A遺跡は斉勝川の支流である谷津川の右岸に立地している。調査地区は丘陵麓の谷底地にあたり、南北に長い平坦面を有している。一部が宅地となっていたほかは、ほとんどが水田として利用されており、わずかに畑地があった。調査時水田は休耕中であり、調査地区の北側及び東側の一部は湿地化していた（第1図）。

このため調査にあたっては排水のための溝を調査区の周囲に掘削している。

標高は127m前後である。



第1図 遺跡地形図

II. 調査の方法と概要

1. 調査の方法

調査はトレンチによる遺構確認を基本とした。

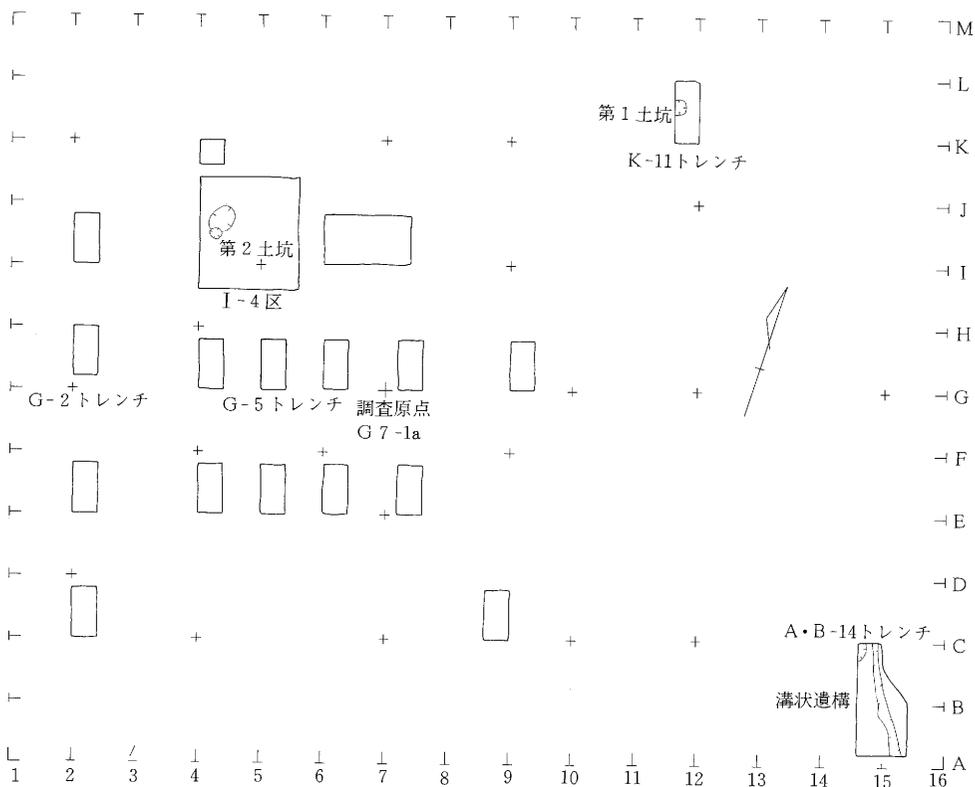
調査区のほぼ中央に原点を設定し、これを基点として東西、南北両方向にそれぞれ直交するかたちで5m間隔で杭打ちを行ない、5m×5mの大グリッドを組んだ。さらにこの大グリッドの中に1m×1mの小グリッドを設定した(第2図)。

トレンチの名称は、大グリッドでは、北に向って5m毎に大文字のアルファベット(A・B・C……M)、東に向って算用数字(0、1、2……15)で表わした。小区画ではそれぞれ1m毎に、北に向って小文字のアルファベット(a、b……e)、東に向って算用数字(1、2……5)で表わした(例：原点G7-1a)。

調査は2×4mのトレンチを基本として、3～6mの一定の間隔で調査を行ない、遺物もしくは遺構が検出されたトレンチを拡張していく方法をとった。

2. 調査概要

10月4日に調査に入り、10月25日に調査を終了している。



第2図 調査トレンチ・遺構配置図

合計18地点に2×4mを基本とするトレンチを設定して確認調査に入り、そのうち遺構・遺物の検出されたトレンチについては拡張を行っている。拡張を行ったトレンチの調査結果は以下のとおりである。

調査区	検出遺構	出土遺物	備考
K-11トレンチ	第1土坑	須恵器坏片（遺構外）	土坑埋土に多量のカーボン含有
A・B-14・15区	溝状遺構	土師器坏片・須恵器片（埋土中）	
I-4・5区	第2土坑	縄文土器片	
I-6・7区		縄文土器片	

III. 基本層位

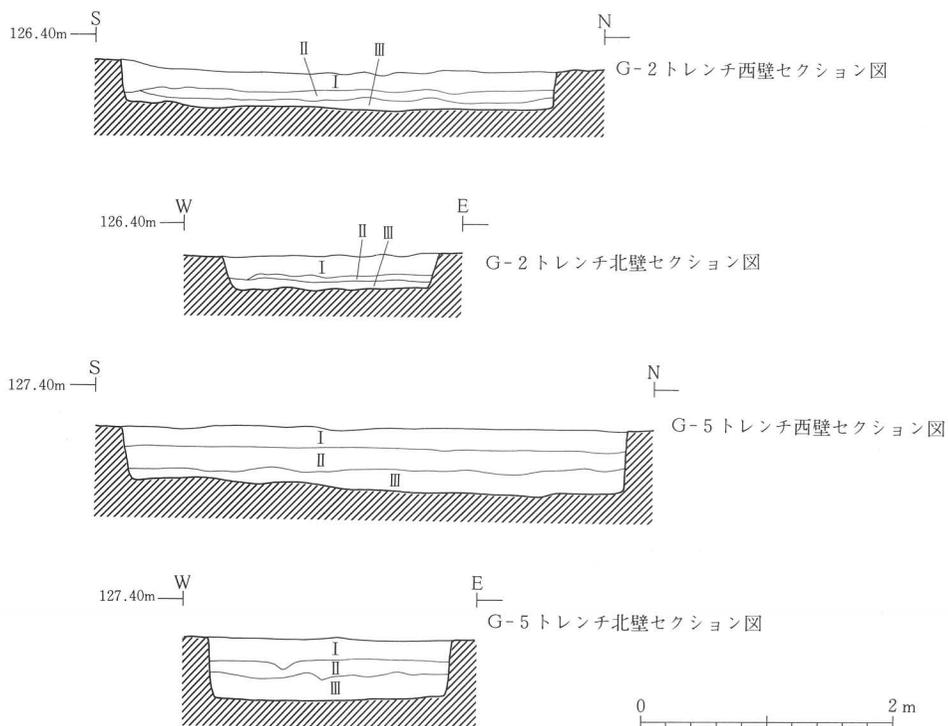
調査区は水田として利用されていたが調査時は休耕しており、一部は湿地化していた。

調査区内において基本的に3枚の層が確認された（第3図）。

I層：水田耕作土

II層：暗褐色シルト土層10Y R3/3。砂を多量に含む層で、調査区全域に分布し、厚さは5～20cm程である。

III層：黒褐色シルト土層10Y R3/2。ブロック的に砂を含む層で、調査区全域に分布し、厚さ



第3図 調査区基本層序（試掘トレンチセクション図）

は5～20cm程である。遺物はIII層中から出土している。

IV層：黄褐色粘土質土層10Y R5/6。いわゆる地山面で遺構確認面となっている。

IV. 発見された遺構

今回の調査で発見された遺構としては、土坑2基、溝状遺構1条がある。

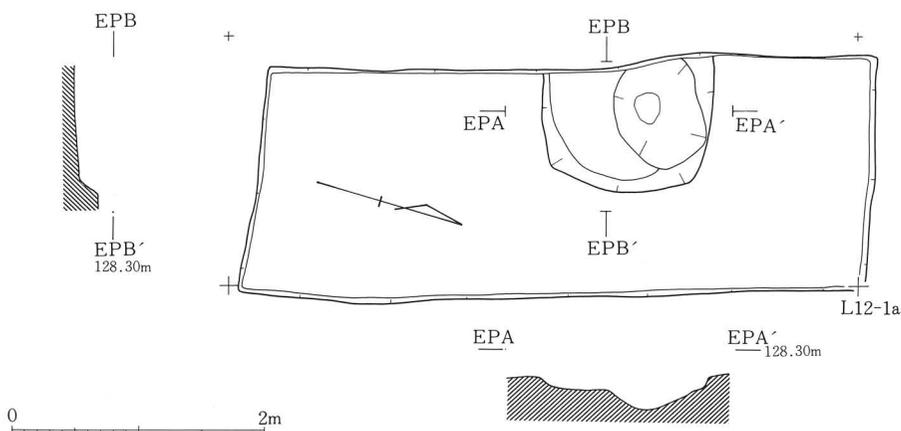
1. 土坑

1号土坑（第4図）

K11-1a～K11-2e区において検出されている。土坑西側は調査区外にかかり全掘はおこなっていない。南北130cm×東西推定150cmの規模を有しており、確認面からは25cm程掘りこまれている。平面形は隅丸方形を呈している。

残存する壁高はそれぞれ北壁10cm、南壁10cm、東壁15cm程度である。底面は北壁側が南北65cm×東西100cmの範囲にわたってさらに15cm程掘りこまれている。

埋土は単層で、暗褐色シルト層10Y R3/3のなかにカーボンを多量に含有している。埋土中からの遺物の出土はなかった。



第4図 1号土坑平面図

2号土坑（第5図）

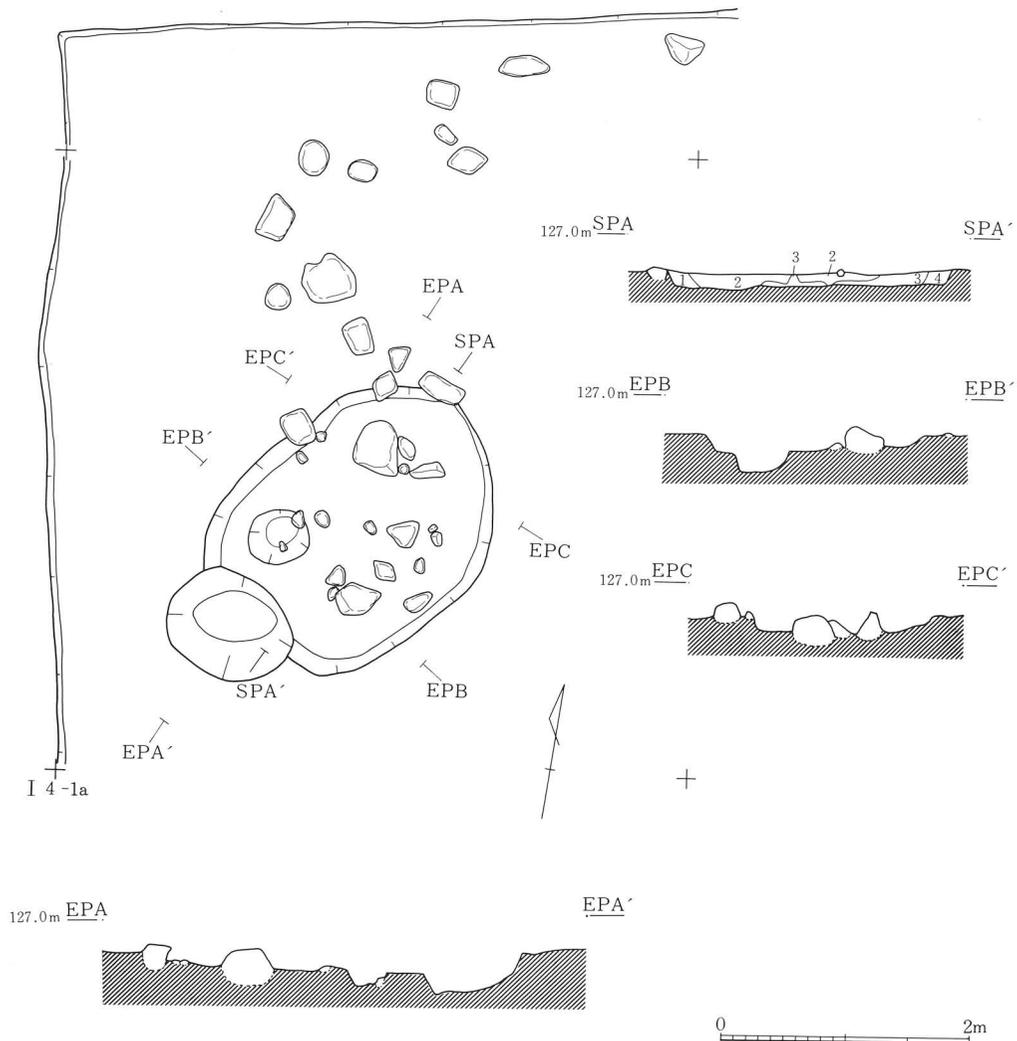
I-4・5区において検出され、長軸300cm×短軸200cmの規模を有している。平面形は長楕円を呈している。埋土は4層に分層できた。埋1層は小礫まじりの黒褐色土層10Y R2/2、埋2層は黒褐色土層10Y R3/2、埋3層はにぶい黄褐色土層10Y R4/3、埋4層は暗褐色土層10Y R3/3となっている。埋土中から縄文土器片が1点出土している（第7図No.1）。

残存する壁高は、北壁10cm、南壁30cm、東壁10cm、西壁8cm程度であり、ゆるやかに立ち上がっている。床面は南壁側が長軸100cm×短軸80cmの規模でさらに掘りこまれており、この部分の壁高は30cm程度である。

2. 溝状遺構 (第6図)

A・B-14・15区において南北方向に走るように検出された。その規模は、巾30~50cm、深さは5~15cm程と浅く、底面はほぼ平坦となっている。埋土は3層に分層された。埋1層は黒褐色土層10Y R2/2、埋2層は暗褐色土層10Y R3/3、埋3層は砂がまじる褐色土層10Y R4/4となっている。埋土中から須恵器と土師器の坏の細片が、それぞれ1点出土しているが図示することはできなかった。

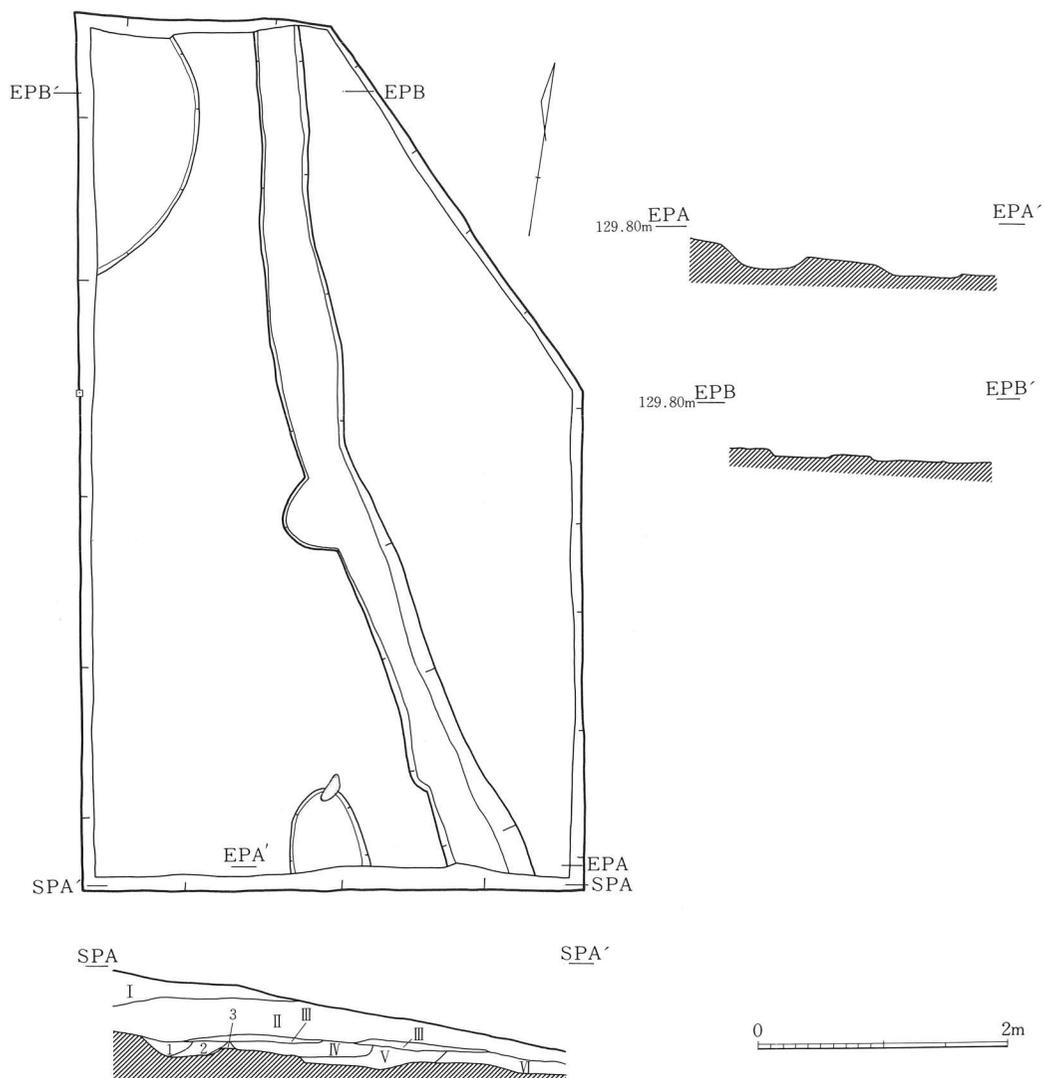
谷津A遺跡からは以上のほかに確認された遺構はなかった。またトレンチ等から出土している縄文土器片は、基本層III層中からのものであるが、これらに伴う遺構は検出されなかった。



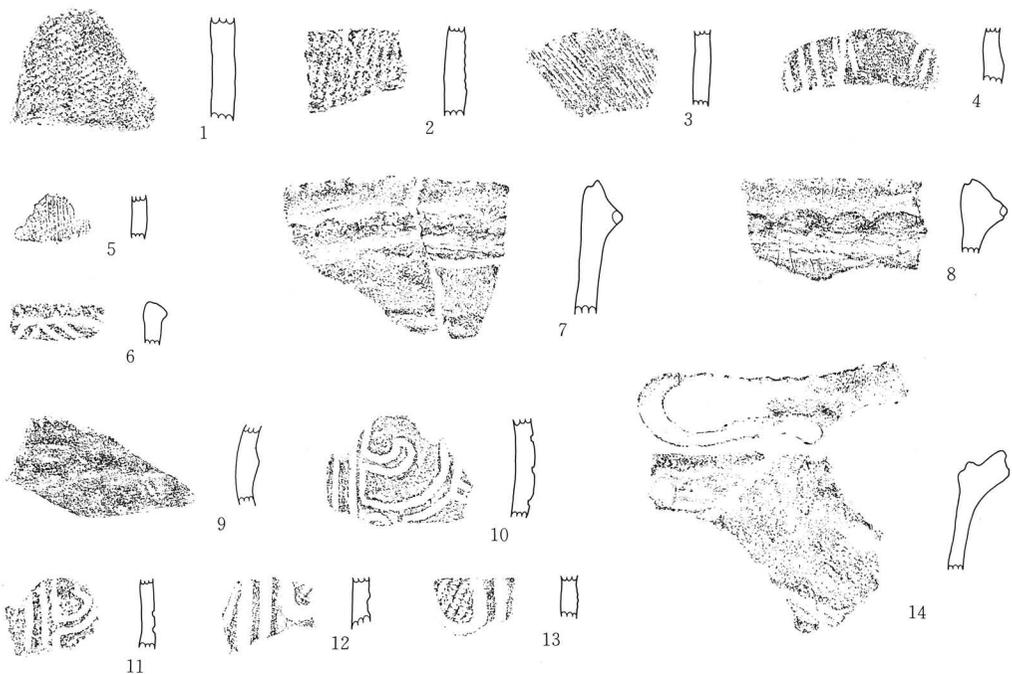
第5図 第2土坑平面図

V. 出土遺物

出土遺物としては、縄文土器片35点、土師器片1点、須恵器片1点がある。このうち2号土坑からの縄文土器片および溝状遺構から出土した土師器、須恵器片を除いて、すべて遺構外出土及び表採によるものである。



第6図 溝状遺構平面図



第7図 出土遺物・土器観察表

No	区画	器形	部位	分類	特徴	地文	胎土・色調	備考	写真図版番号
1	2号土坑	深鉢	体部	1類		縄文LR	暗黄褐色・小砂粒		10-1
2		深鉢	体部	1類		縄文	黄褐色		10-2
3		深鉢	体部	1類		撚り糸	灰白色・小砂粒		10-3
4		深鉢	底部	1類	縦位の平行沈線	無文	黄褐色・小砂粒		10-4
5		深鉢	体部	1類		条線	暗赤褐色・小砂粒		10-5
6		深鉢	口縁部	2類	口縁部肥厚・山形沈線		黄褐色・小砂粒		10-6
7		深鉢	口縁部	2類	口唇部沈線・隆帯上に指頭状圧痕	無文	黄褐色・小砂粒	同一個体か	10-8
8		深鉢	口縁部	2類	口唇部沈線・隆帯上に指頭状圧痕	無文	黄褐色・小砂粒		10-9
9		深鉢	口頸部	2類		縄文?	黄褐色・小砂粒		10-10
10		深鉢	体部	3類	横位の平行沈線・弧線状沈線	無文	暗黄褐色・小砂粒		10-11
11		深鉢	体部	3類	横位の平行沈線・弧線状沈線	無文	暗黄褐色・小砂粒		10-12
12		深鉢	体部	4類	幅広の平行沈線の間が隆帯化、楕円区画	縄文LR	赤褐色・小砂粒		10-13
13		深鉢	体部	4類	幅広の平行沈線の間が隆帯化、楕円区画	縄文LR	赤褐色・小砂粒		10-14
14		深鉢	口縁部	2類	「ㄣ」字状隆帯	無文	黄褐色・小砂粒		10-7

第7図 出土遺物・土器

第6図 溝状遺構土層注記表

	層	土色	土性	備考
基本層	I			盛土層
	II	褐色土層 10YR4/4	シルト	旧表土層
	III	褐色土層 10YR4/4	砂質シルト	II層土に多量の砂が混じる
	IV	黒褐色土層 10YR3/2	シルト	
	V	暗褐色土層 10YR3/3	シルト	土坑状の落ちこみ埋土
	VI	にぶい黄褐色土層 10YR5/4	シルト	
SD1溝	1	黒褐色土層 10YR2/2	シルト	
	2	黒褐色土層 10YR3/3	シルト	

1. 縄文土器

土器はいずれも深鉢片で、口縁部資料3点をのぞいてほかはすべて体部資料である。これらの土器について、胎土・内外面の文様及び文様要素について観察を行なった結果、次の4類に分類することができた(第7図)。

第1類(第7図1～5)

いずれも胴部資料で、地文として縄文もしくは沈線が施文される。4は底部を欠いているが底部からの立ち上がり部分と思われる。

第2類(第7図6～9・14)

口縁部もしくは口頸部資料である。6は口唇部が肥厚され、その下部に山形状の沈線がひかれている。14は口縁部に「∞」字状の隆帯がつき、口唇部に沈線がめぐっている。7・8は口縁部につけられた隆帯上に指頭による押圧がされ、口唇部に沈線がめぐっている。9は口頸部資料で外反気味に立ち上がる。くびれ部分が指頭による調整からわずかに隆帯化しており、その下部に縄文が施文されている。

第3類(第7図10・11)

胴部資料である。小破片のため全体の文様構成は不明であるが、10・11ともに縦位の平行沈線から曲線状になるとと思われる沈線がひかれている。

第4類(第7図12・13)

胴部資料である。12・13ともに縦位の中の広い平行沈線がひかれその間が隆帯化している。沈線による楕円形の区画の中に縄文(LR)が施文されている。

これらの出土遺物は、いずれも小破片であり全体の文様構成は不明であるが、2・4類とした土器は縄文時代中期大木7～8式期に、3類の土器は後期前葉に比定されるものと思われる。

VI. まとめ

1. 谷津A遺跡は蕃山丘陵の西端、斉勝川の支流である谷津川右岸の谷底地に位置している。
2. 発見された遺構としては、土坑2基および溝状遺構があるが時期は特定できなかった。
3. 発見された遺物としては、縄文土器・土師器・須恵器・剝片類がある。縄文土器については、中期大木7～8式期及び後期前葉のものと思われる。土師器と須恵器については時期を特定することはできないが、平安時代のものと思われる。

写 真 图 版



写真1
遺跡遠景
(南東から)

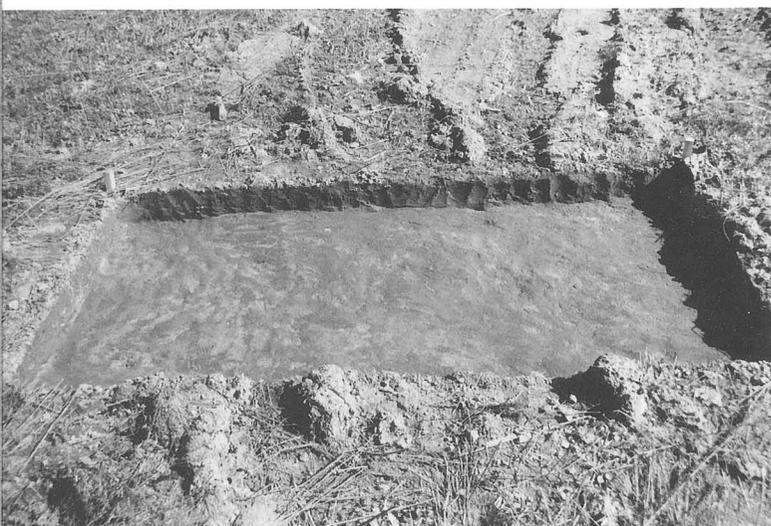


写真2
G-2 トレンチ



写真3
G-5 トレンチ

写真4
I-4区調査状況



写真5
2号土坑



写真6
I-4区遺物出土状態

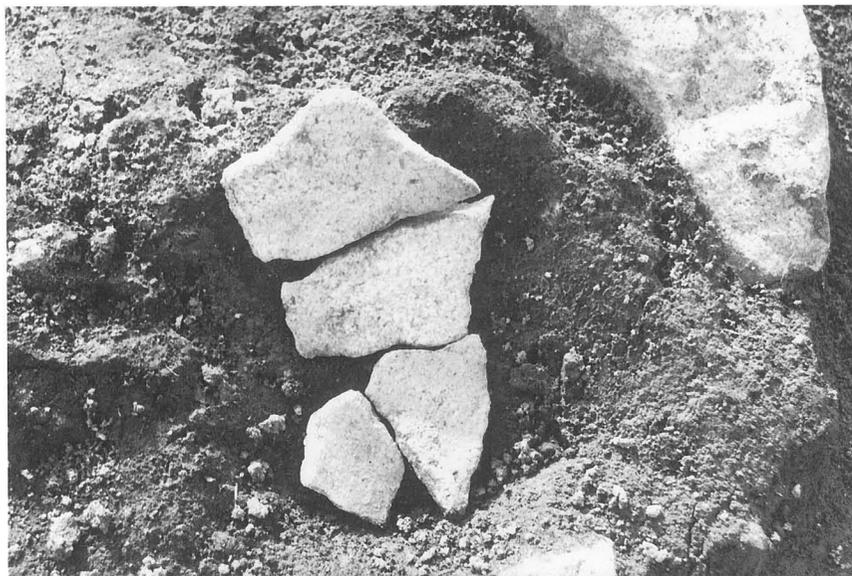




写真7
1号土坑



写真8
溝状遺構検出状況

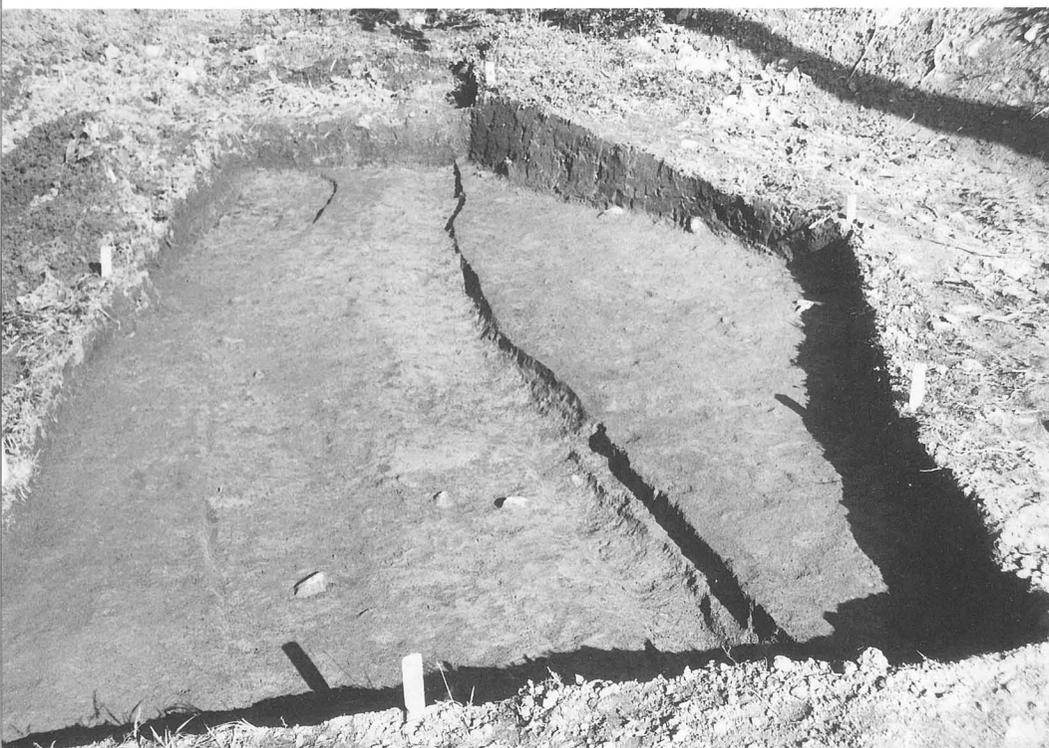


写真9
溝状遺構完掘状況

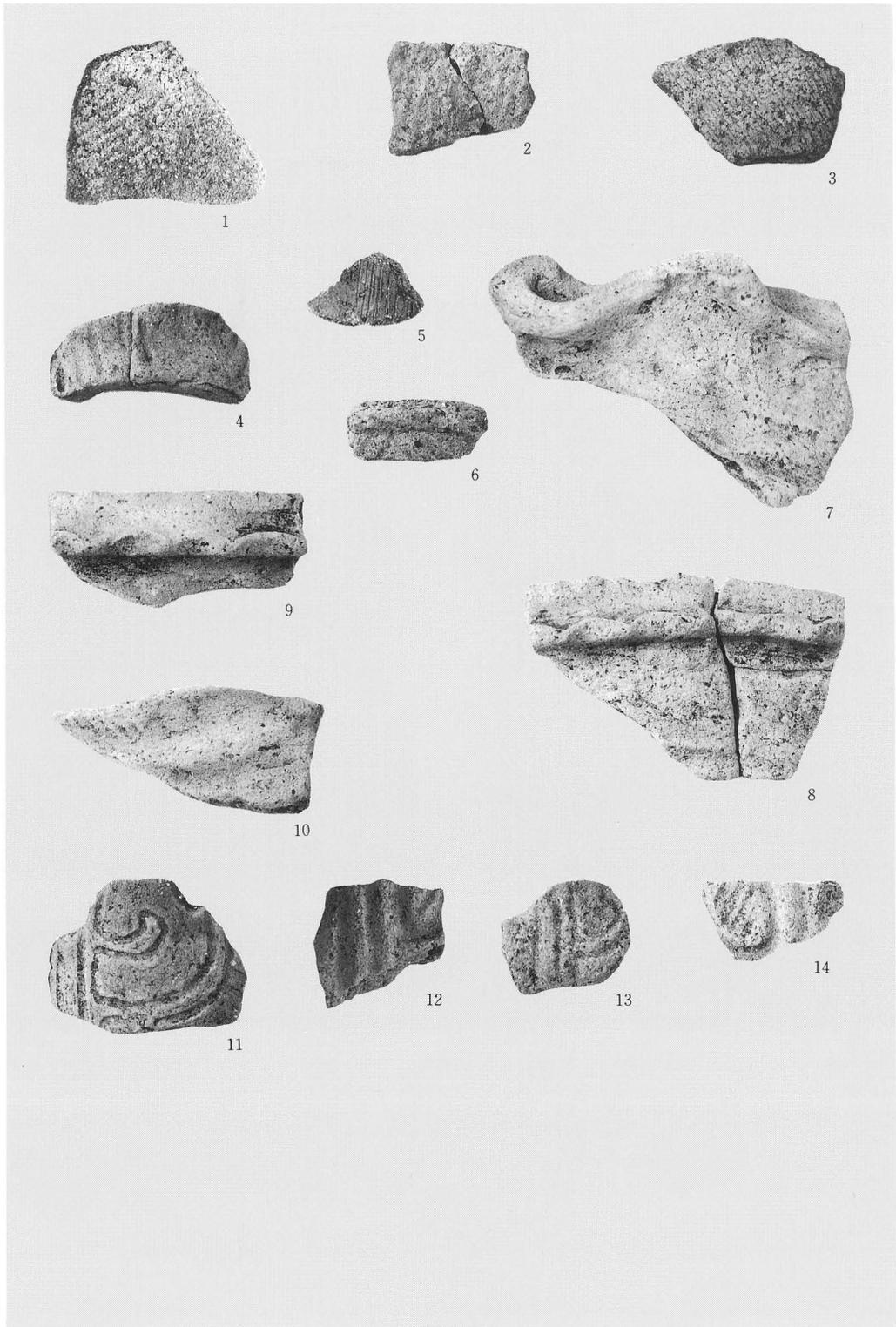


写真10 出土遺物・土器

(2) 谷津B遺跡

調 査 要 項

1. 遺 跡 番 号 宮城県遺跡地名表番号 21147
2. 遺跡の所在地 仙台市上愛子字谷津18番地
3. 調 査 期 間 1985年10月25日
4. 調査対象面積 約1,000 m²
5. 調 査 面 積 約8m²

本文目次

I. 遺跡の立地	25
II. 調査の方法と結果	25
1. 調査の方法	25
2. 調査結果	26
III. 出土遺物	26
1. 羽口	26
2. 鉄滓	27
IV. 宮城地区内の製鉄遺跡の分布	27
V. まとめ	30

挿図・表目次

第1図 遺跡地形図	25
第2図 出土遺物・羽口	26
第3図 宮城地区内の製鉄遺跡分布図	28
第4図 黒森山遺跡遺構配置図	29

写真図版目次

写真1 出土遺物・羽口、鉄滓	32
写真2 黒森山遺跡調査区	33
写真3 黒森山遺跡1号炉検出状況	33
写真4 黒森山遺跡1号炉完掘状況	33
写真5 黒森山遺跡出土遺物・羽口、 鉄滓	34

I. 遺跡の立地

谷津B遺跡は谷津A遺跡の北方約150mの地点、谷津川と芦見沼（通称ポッコレ堤）から流れる小河川との合流点の北側の傾斜地にある。現状は山林となっていた。

標高は126m前後である（第1図）。

II. 調査の方法と結果

1. 調査の方法

分布調査時に鉄滓が集中して表採されたことから、製鉄関連遺構の存在が予想されていたが、本調査時にこの地点に伐採作業のための作業道路が造られていたため、当初遺跡主体部と考えていた部分の調査は不可能となっていた。

このため、任意の地点に2×4mのテストトレンチを設定し調査に入ったが、検出された土層状態は大きな攪乱をうけたことを示しており、テストトレンチを入れたのみで調査をうききった。



第1図 遺跡地形図

2. 調査結果

分布調査時に表採されていた鉄滓（流出滓）・羽口のほかは、テストトレンチから羽口の小破片4点が出土している。遺構は検出されなかった。

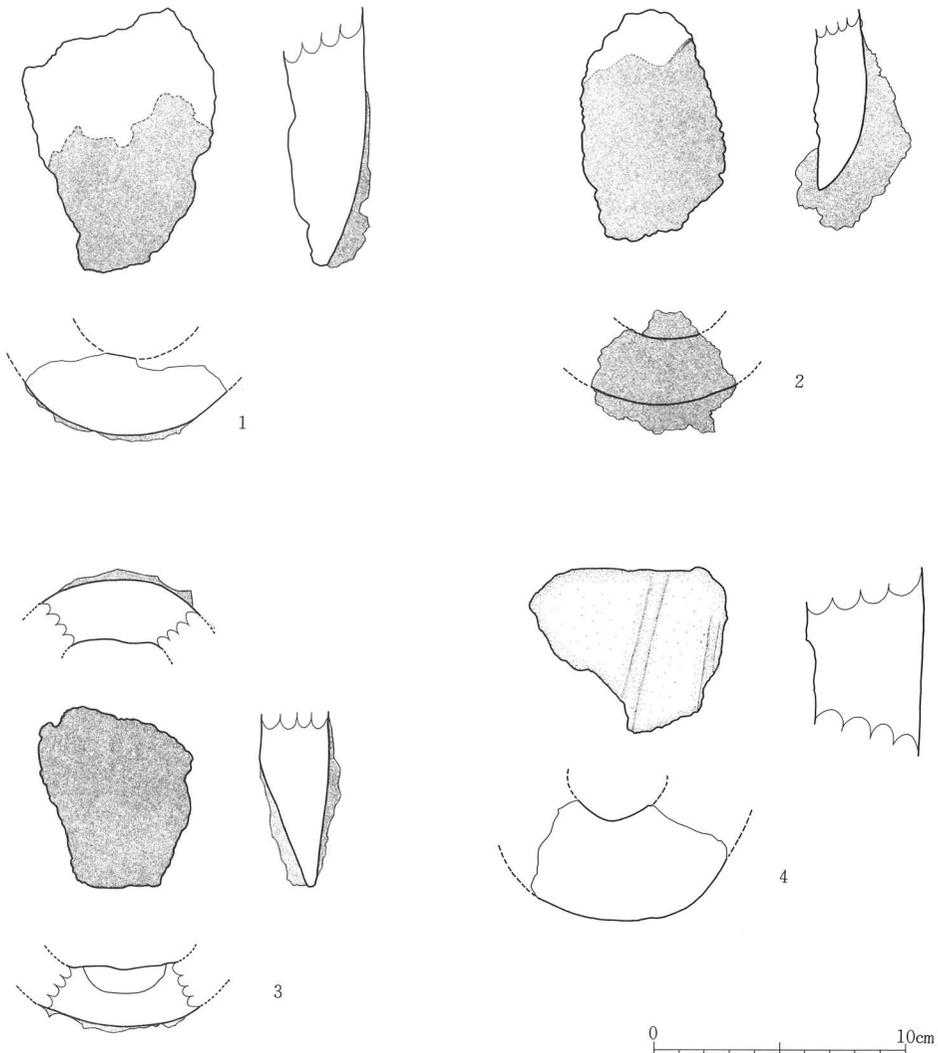
III. 出土遺物

トレンチおよび周辺から羽口の破片および鉄滓が出土している。

1. 羽口

出土した羽口片は5点で、うち3点には鉄滓や胎土中のガラス質が変化したと思われるものが付着している（第2図1～4）。

このうちの1～3は羽口の先端部の破片で、炉体送風孔に取り付けられていたものと考えら



第2図 出土遺物・羽口

れるが、同一個体の羽口であるのかは、小破片でもあり判断できかねた。また4は羽口の体部資料で、外面には細い溝状のものがつけられている。

2. 鉄滓

分布調査時に表採されていた鉄滓のほかに、流出滓と思われる鉄滓が1点出土している（写真図版1-6）。

羽口や流出滓の出土から、製鉄炉が存在していたことがうかがわれるが、前述のとおり遺跡主体部と考えていた部分が攪乱をうけていたことから、炉体の検出につながるような遺構・炉壁材・炉内残留滓等の遺物は確認されなかった。

IV. 宮城地区における製鉄遺跡の分布について

谷津B遺跡とともに、芦見遺跡からも鉄滓が表採されており、表採調査時には炉体の一部と思われる焼土遺構も確認されている。この芦見遺跡も谷津B遺跡と同様、芦見堤から流れでる小河川の左岸南向き傾斜面に位置している。

今のところ愛子地区においては、この2遺跡以外に製鉄関係遺跡は確認されていない。宮城地区においてこれまで確認されている遺跡としては、調査が行なわれたものとして、蒲沢山遺跡（宮城町教委：1982～1984一部概報済）・黒森山遺跡（宮城町教委：1985未報告）があるほか、分布調査において作並地区の鎌倉山遺跡からも鉄滓が表採されている（第3図）。

蒲沢山遺跡は、宮城地区北部の芋沢地区を流れる赤坂川左岸に位置し、標高は210m程度となっている。区画整理事業に伴って調査が行なわれ、丘陵尾根部において縄文時代早期末葉～前期初頭を中心とする遺構が確認されている。製鉄関連遺構はその丘陵麓の赤坂川沿の平坦部に確認され、標高は180m程度である。

表採調査時から一帯に大量の鉄滓が確認されていたが、トレンチ調査において製鉄炉の一部と考えられる焼土遺構が検出され、赤坂川からこの遺構に向かって巾1m程度の水路状遺構も確認されている。生産の行なわれていた時期については、所在を確認したのみで埋めもどしを行なったため不明である。

黒森山遺跡は、吉成地区を流れる七北田川の支流である吉成川に沿った山間の谷底地に位置し、標高は147m程度となっている。区画整理事業に伴って調査が行なわれ、製鉄炉跡4基が検出されたほか、炭窯跡などが発見されているが、その他の遺構は確認できなかった。

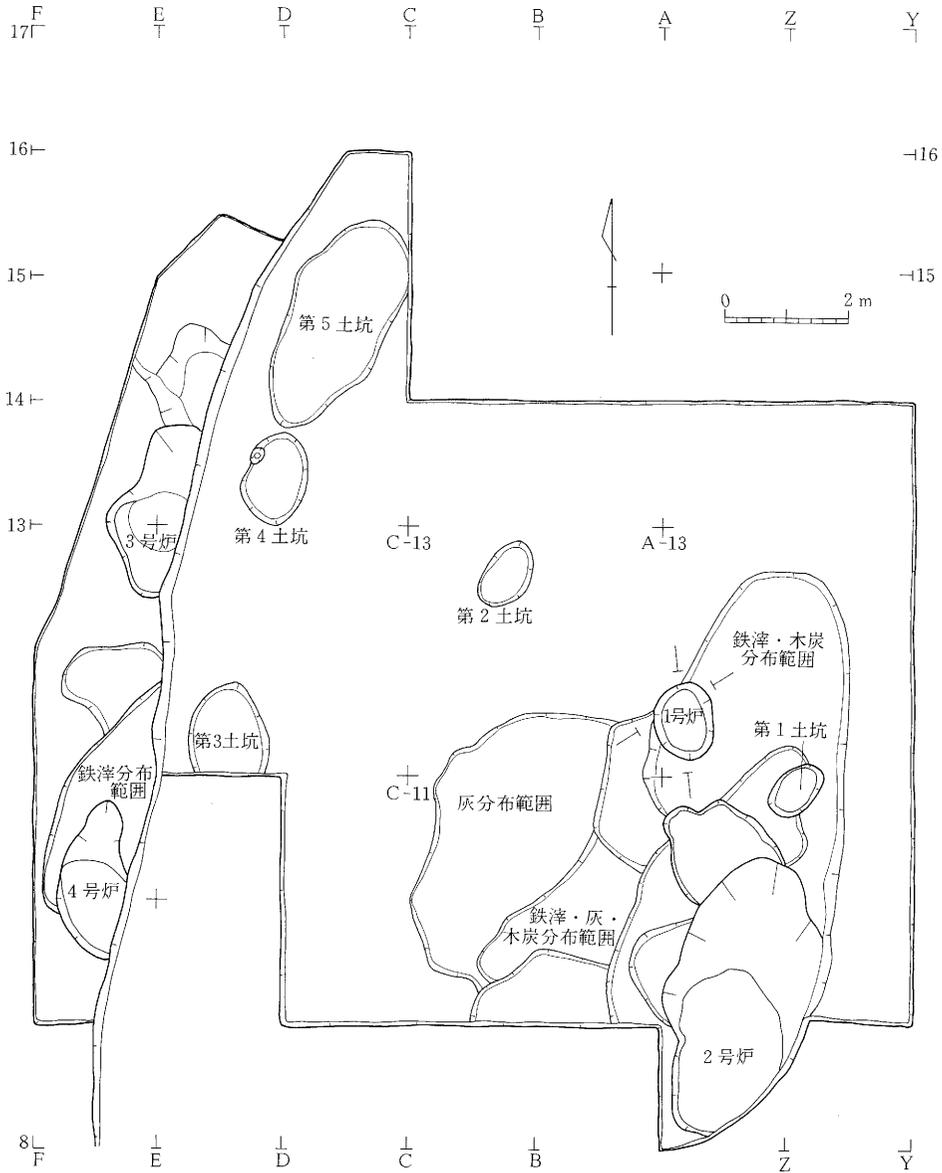
このうち1号炉としたものは、吉成川近くの平坦面に構築されており、炉の周辺6×6m程の範囲に灰と木炭及び鉄滓が拡がっていた（第4図）。炉の本体は、残存部高約0.4m、上部径約1.2m、底部径約1.0mを測る。形状は円筒形のものである。炉壁にはスサ入の粘土が用いられており、還元焼成をうけたためか青灰色を呈していた。炉底には木炭と焼土がしきつめられ



第3図 宮城地区内の製鉄遺跡分布図

たような状態で検出され、厚さは約20cm程であった。その上にあるような形で羽口が、炉壁南側から中央に向かって出土している。

黒森山で確認された4基の製鉄炉跡は、約300m²の範囲に集中しており、平坦面に構築された炉（2基）と、斜面を利用して構築された炉（2基）に分けることができる（第4図）。炭窯跡は、斜面を利用した素掘りの土坑状のもので、形状は楕円形を呈していた。



第4図 黒森山遺跡遺構配置図

黒森山遺跡で鉄生産の行なわれていた時期については、1号炉の形態や灰中からロクロ土師器坏片が出土していることからみて、平安時代以降と考えられる。

現在のところ確認されている製鉄に関する遺跡は、以上の5遺跡である。これらの遺跡の立地についてみると、いずれも河川沿の緩斜面にあり、山間地に位置している。

宮城地区内にはこれら5遺跡以外にも、各地に「鉄くずがでた」という話があるほか、「銅谷原」・「鍛冶屋前」などの地名もこのっている。今後詳細な分布調査を実施していけば、さらに製鉄関係遺跡が発見される可能性があると思われる。

VI. まとめ

1. 谷津B遺跡は蕃山丘陵の西端、斉勝川の支流である谷津川と芦見沼から流れでる小河川との合流点、北側の傾斜面に位置している。
2. 発見された遺物としては、羽口および鉄滓がある。
3. 調査対象地点が大きく攪乱をうけていたため遺構は確認されなかった。

写 真 图 版

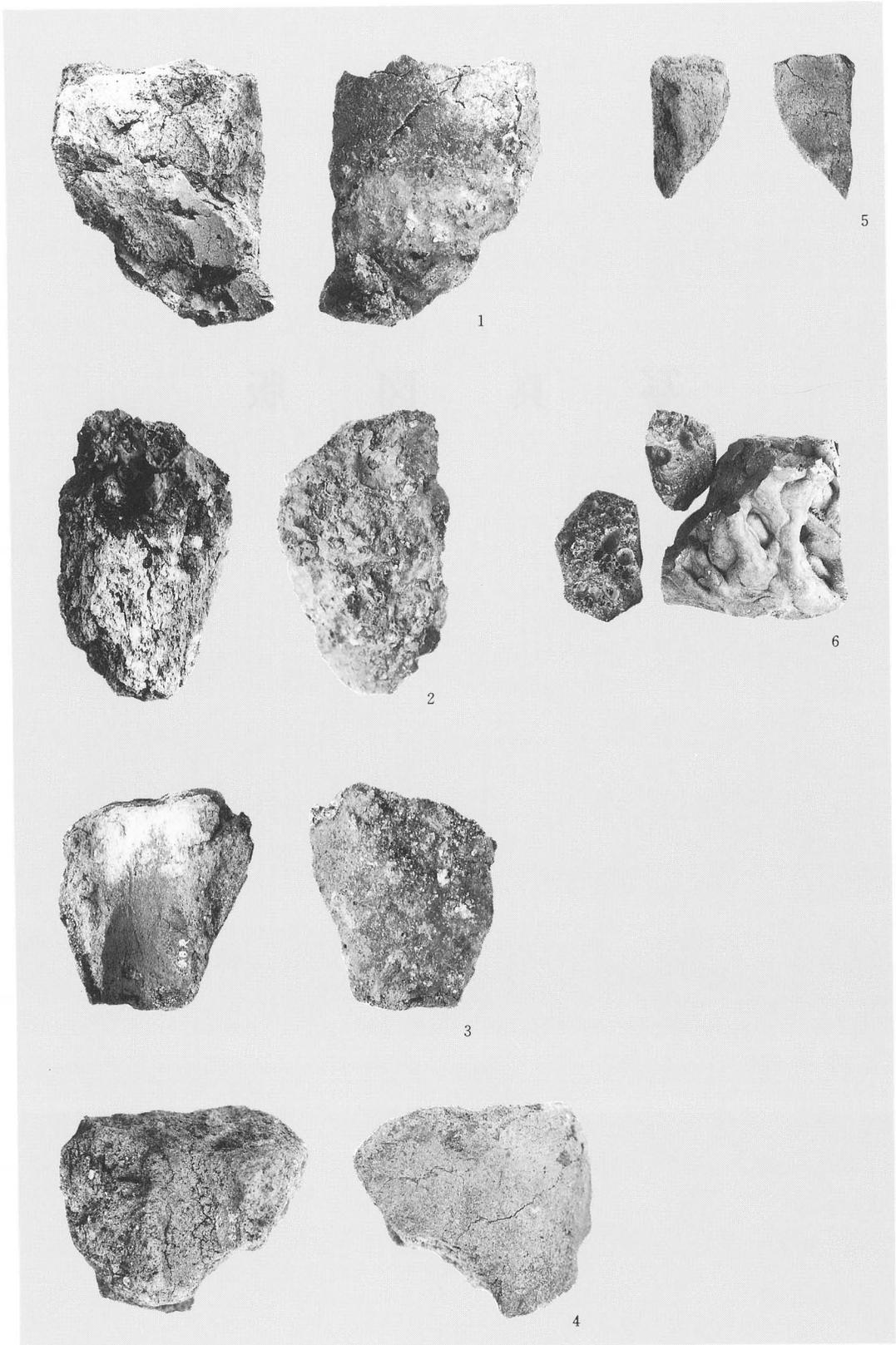


写真1 出土遺物：羽口・鉄滓

写真2
黒森山遺跡(吉成)

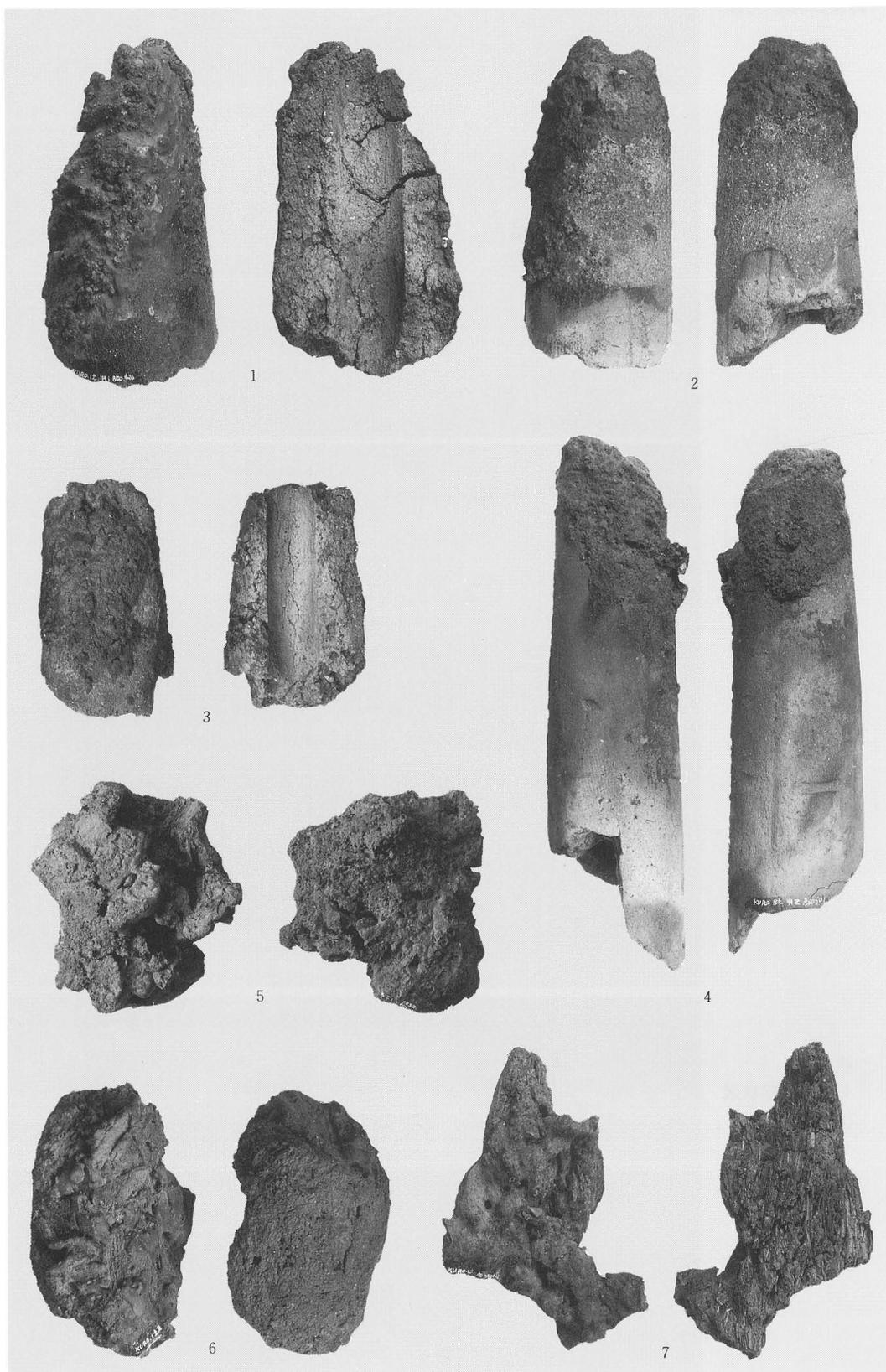


写真3
1号炉検出状況
(黒森山遺跡)



写真4
1号炉完掘状況
(黒森山遺跡)





No 1・3・5・7—第1号炉出土

No 2—第5号炉 No 4—第8号炉

写真5 黒森山遺跡出土遺物・羽口、鉄滓

(3) 芦見遺跡

調 査 要 項

1. 遺跡記号 宮城県遺跡地名表番号 21148
2. 遺跡所在地 仙台市上愛子字峯岸地内
3. 調査期間 1985年10月26日～12月2日
4. 調査対象面積 約3,000m²
5. 調査面積 約900m²

本文目次

I. 遺跡の立地	37
II. 調査の方法と結果	37
1. 調査の方法	37
2. 調査の結果	38
III. 遺物包含層	38
IV. 出土遺物	39
1. 土器	39
2. 石器	53
V. まとめ	54

挿図・表目次

第1図 遺跡地形図	37
第2図 調査区平面図	38
第3図 遺物包含層セクション図	39
第4図 出土遺物・実測土器	45
第5図 出土遺物・拓本土器(1)	46
第6図 出土遺物・拓本土器(2)	47
第7図 出土遺物・拓本土器(3)	48
第8図 出土遺物・拓本土器(4)	49
第9図 出土遺物・拓本土器(5)	50
第10図 出土遺物・拓本土器(6)	51
第11図 出土遺物・拓本土器(7)	52
第12図 出土遺物・石器(1)	55
第13図 出土遺物・石器(2)	56
第14図 出土遺物・石器(3)	57
第15図 出土遺物・石器(4)	58
表 1 石器・石製品観察表	54

写真図版目次

写真1 調査区伐採状況(東から)	62
写真2 遺跡遠景	62
写真3 作業風景	62
写真4 遺物出土状況 (包含層・上面)	63
写真5 遺物出土状況 (包含層中・東から)	63
写真6 遺物出土状況 (包含層中・北から)	63
写真7 遺物出土状態	64
写真8 石棒出土状態	64
写真9 遺物包含層完掘状況	64
写真10 出土遺物・復元土器	65
写真11 出土遺物・拓本土器(1)	66
写真12 出土遺物・拓本土器(2)	67
写真13 出土遺物・拓本土器(3)	68
写真14 出土遺物・拓本土器(4)	69
写真15 出土遺物・拓本土器(5)	70
写真16 出土遺物・拓本土器(6)	71
写真17 出土遺物・拓本土器(7)	72
写真18 出土遺物・石器(1)	73
写真19 出土遺物・石器(2)	74

I. 遺跡の立地

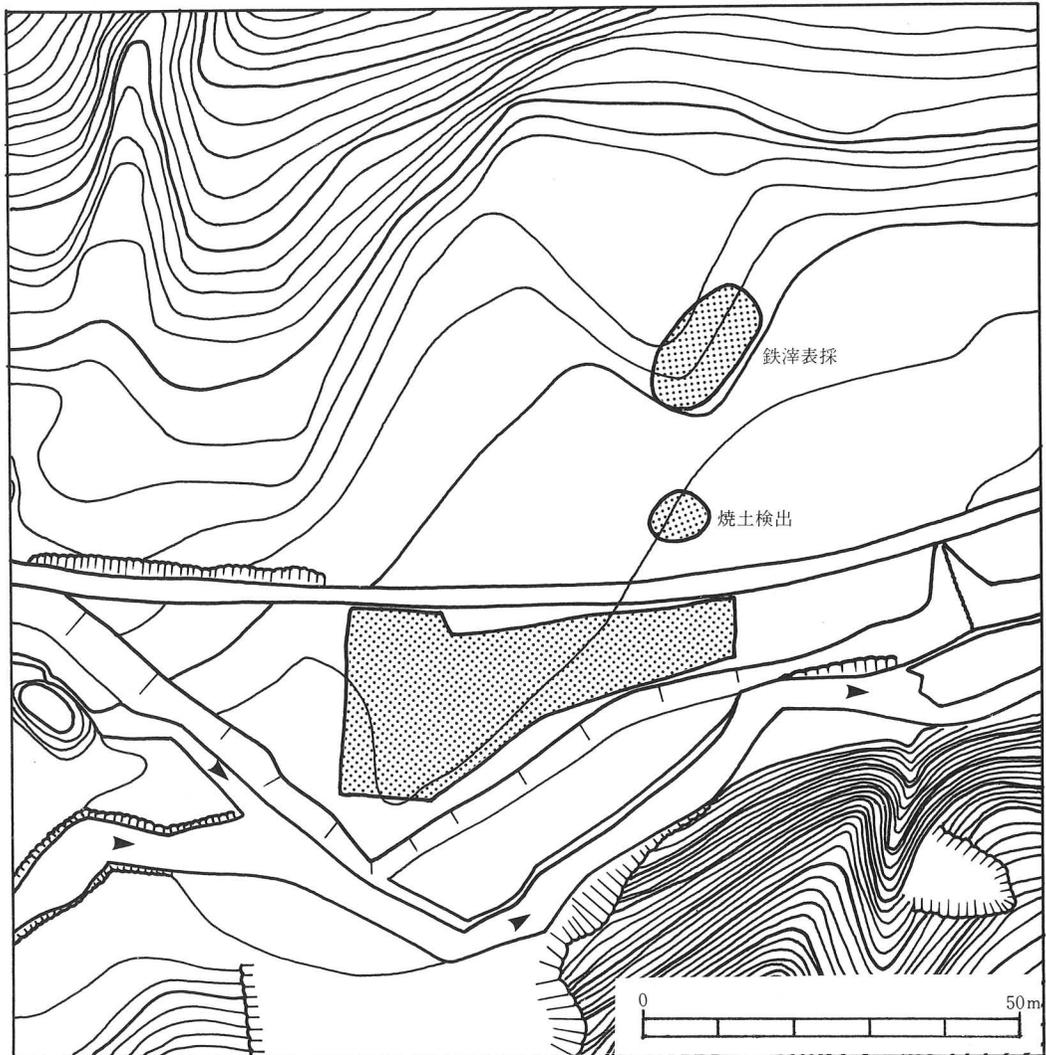
芦見遺跡は谷津A・B遺跡の西方約350mの地点にある。芦見堤（通称ポッコレ堤）から流れ
る小河川の左岸にあり、南向きの緩斜面から続く平坦面にかけて立地している。現状は山林
となっていた（第1図）。

標高は134m前後である。

II. 調査の方法と結果

1. 調査の方法

分布調査時には今回の調査地点の北側緩斜面において、鉄滓が表採されていたほか、伐根さ



第1図 遺跡地形図

れた跡に焼土等も露出していたことから、谷津B遺跡と同様製鉄関連遺構の存在が予想されていた。

しかし本調査時に、この地点に厚く盛土が行なわれていたほか、大規模な切土も行なわれていた。そのため、当初予定していた地点の南側の平坦面を調査対象とした。

調査区全域において、重機による伐根及び表土除去作業を行なったのち、ジョレン等により精査を行ないながら遺構検出作業に入った。

2. 調査の結果

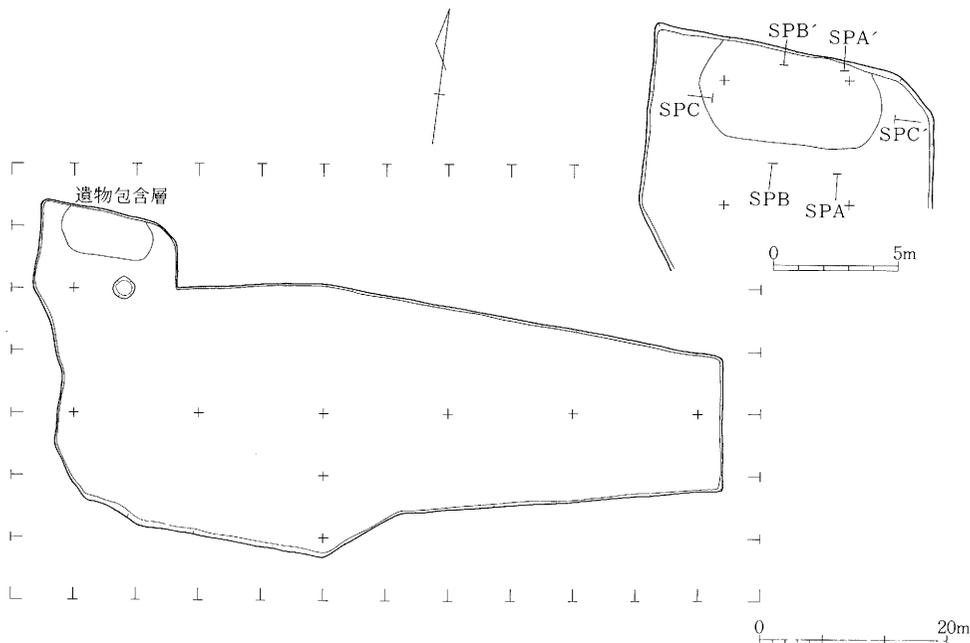
調査区のうち東側部分からの遺物の出土、遺構の検出はなかった。調査区北西道路側の地点に、遺物が多量に集中していたが、それに伴う遺構は検出されなかった。

また、調査区北側の分布調査時に鉄滓や焼土が確認されていた区域のうち、自然地形が残っていると思われる地点3ヶ所に、任意のテストトレンチ（2m×6m）を設定し、調査に入ったが遺構・遺物ともに確認されなかった。

III. 遺物包含層（第3図）

重機による伐根作業ののち、遺構確認面までの表土除去作業を行なっている。調査区の現況はほぼ平坦面であるが、西側部分では一段下るかたちとなり、南に向った傾斜面となっている。東側部分との比高差は約1m程である（第2図）。

東側調査区では、表土から20～30cm程度で地山面となり、遺物の出土はほとんどなかった。西側調査区において、調査区西端にある凹地を呈する部分に北側から流れこむ形で遺物包含

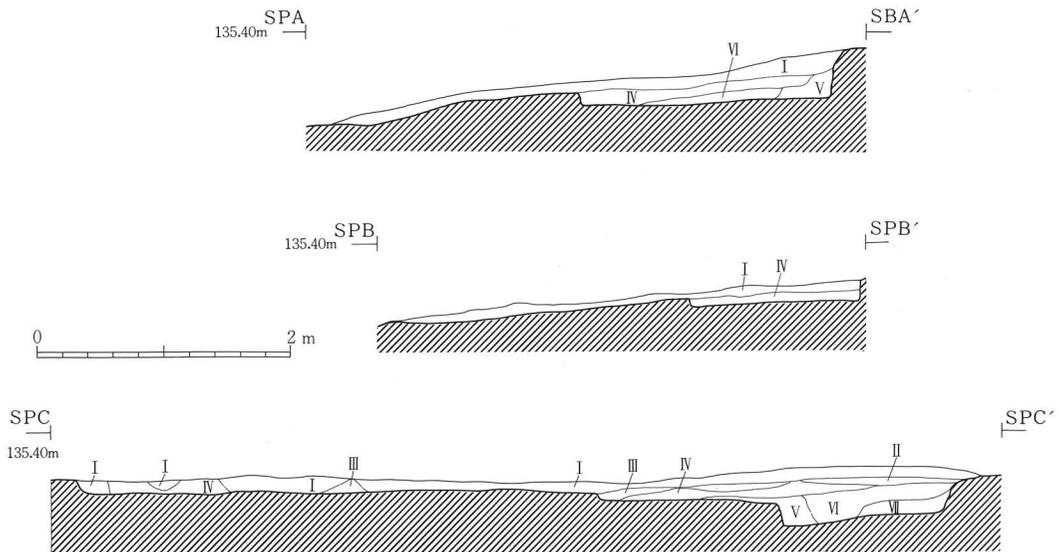


第2図 調査区・平面図

層を確認した。包含層までの表土からのレベルは、50～70cm程度である。包含層の厚さは、それぞれ北側で約20cm、南側で約10cm、東側で30cm程である。

第3図 遺物包含層土層注記表

層	土色	土性	備考
I	黒色土層 10Y R2/1	シルト	ボソボソでしまり無・遺物を多く含有
II	にぶい黄褐色土層 10Y R5/4	シルト	遺物を多く含有
III	褐色土層 10Y R4/4	シルト	遺物を多く含有
IV	褐色土層 10Y R4/6	シルト	1cm大の小礫含有、遺物を多く含有
V	暗褐色土層 10Y R3/4	シルト	1cm大の小礫含有
VI	黒褐色土層 10Y R3/2	シルト	1cm大の小礫含有
VII	褐色土層 10Y R4/6	シルト	



第3図 遺物包含層セクション図

IV. 出土遺物

1. 土器

今回の調査で出土した土器の分類は、文様等の特徴から時期区分の可能なものをA群とし、地文のみのものをB群、それ以外の不明のものをC群としてあつかった。

A群土器については、器形や文様等から時期区分を行い、第1群～第3群まで設定した。

(1) 第1群土器

縄文時代後期に位置づけられる土器群（1～13）。

(2) 第2群土器

晩期末葉に位置づけられる土器群で、深鉢・鉢形土器・浅鉢形土器・壺形土器がある。これはさらに文様によって細分される。

<深鉢・鉢形土器>

- A類 : 口頸部が変化なく立ち上がるもの (第5図16・17)。
B類 : 口頸部がくびれて、口縁部が外反・外傾もしくは直立するもの (実測図1・2、14・15・18～46)、口縁部の形態や口頸部の文様から次の6類に分類される。
B I類 : 平縁な口縁部が直立、頸部に沈線が施文されるもの。
B II類 : 平縁な口縁部が外反、頸部が無文となるもの (a : 突起有、b : 突起無)。
B III類 : 小波状口縁、頸部が無文となるもの (a : 口縁部直立、b : 口縁部外反)。
B IV類 : 平縁な口縁部が直立、頸部が無文となるもの。
B V類 : 平縁な口縁部が外反、頸部に沈線が施文されるもの。
B VI類 : 小波状口縁、頸部に沈線が施文されるもの (a : 口縁部外反、b : 口縁部直立)。

<浅鉢形土器>

- A類 : 口縁部がやや内弯気味に立ち上がるもの (48・49・51・52・53)。
B類 : 口縁部がやや外反気味に立ち上がるもの (47・50・54)。
C類 : 台付浅鉢 (105～108)。

<壺形土器>

肩部～体部資料が中心であり、細分は行なわず一括してとりあつかった (55～62)。

(3) 第3群土器

弥生時代初頭に位置づけられる土器群 (64～68)。

(1) 第1群土器 (第5図1～13)

縄文時代後期に位置づけられる土器群で、いずれも深鉢・鉢型土器である。

1・2は二条単位の細い隆線の上に、粘土粒による貼り瘤がつけられている。地文は無文となっている。1の沈線化した部分には丹塗り痕がみられる。

3は横位沈線と蛇行しながら垂下する沈線が交差している。地文は縄文で、縄文原体はRLである。4は横位沈線がめぐり、地文は縄文となっている。縄文原体はRLである。

5～13は、平行沈線によって区画され、短沈線や刺突文がつけられるものである。

6～8は、間隔のあいた平行沈線の中に「ノ」字状の短沈線がつけられている。地文は無文となっている。7は、沈線の上に粘土粒による貼り瘤がつけられている。9～13はいずれも小破片であり、全体の文様構成は不明であるが、平行沈線によって区画された間に刺突文又は縦位の刻目がつけられている。

13は口縁部資料であり、平口縁の口唇部に縦位の刻目がつけられその下に平行沈線がめぐっている。

(2) 第2群土器

縄文時代晩期に位置づけられる土器群。深鉢・鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器の3形態に分類される。

<深鉢・鉢形土器>

口縁部資料

A類：口頸部が変化なく立ち上がるもの（第5図16・17）。

B類：口頸部がくびれるもの（14・15・18～46）。

口頸部がくびれて、口縁部が外反・外傾もしくは直立するものである。口縁部の形態や口頸部の文様から次の6類に分かれる。

B I類：平縁な口縁部が直立、頸部に沈線が施文されるもの。

B II類：平縁な口縁部が外反、頸部が無文となるもの（a. 突起有、b. 突起無）。

B III類：小波状口縁、頸部が無文となるもの（a. 口縁部直立、b. 口縁部外反）。

B IV類：平縁な口縁部が直立、頸部が無文となるもの。

B V類：平縁な口縁部が外反、頸部に沈線が施文されるもの。

B VI類：小波状口縁、頸部に沈線が施文されるもの（a. 口縁部外反、b. 口縁部直立）。

B I類：平口縁、直立、頸部に沈線（14・15）

16は、比較的小型の土器と思われる。口頸部がやや内弯気味に立ち上がり、内面には低く陵線がつけられている。口縁部は平行沈線によって、体部文様と区画している。体部文様は縄文となっている。

17は、直立気味に立ち上がる口縁上部が外反し、口唇部に沈線がひかれている。

B II a類：平口縁、外反、頸部無文、突起有（19）

外反する口縁部に頂部が二分された低い山形の突起がつけられている。体部文様は不明である。

B II b類：平口縁、外反、頸部無文、突起無（20）

口頸部の無文帯の中がせまく、体部文様は縄文が施文されている。

B III a類：小波状口縁・直立・頸部無文（実測図1・2、18・21～23・25～27・29・33）

口縁部が上からの押圧もしくは刻み目状の沈線によって、小波状を呈するもの。口唇部の側面が押圧されて小波状を呈するもの（18・21・22）と、口唇部が押圧もしくは刻み目状の沈線によって小波状を呈するもの（実測図1・2、23・25～27・29・33）がある。

頸部の無文帯の中がせまく、体部文様は縄文が施文されている。縄文原体は22・29がLRのほかは、表面が摩滅しているため不明である。このうち実測図2は、頸部に沈線がめぐっている。

B III b 類：小波状口縁、外反、頸部無文 (34)

34は、口唇部の側面が上からの押圧によって小波状を呈しており、やや外反気味に立ち上がっている。

B IV 類：平口縁、直立、頸部無文 (28・32・35・36)

28は、平口縁でやや内弯気味に立ち上がり、口頸部が大きくくびれている。口縁部の無文帯の中が広く、体部文様はLRの縄文が施文されている。

32は、平口縁でやや外反気味に立ち上がっている。口唇部がやや肥厚されており、沈線によって区画された口縁部の上端に、縄文が施文されている。

35は、口縁部の上端がやや外反気味に立ち上がっている。口頸部のくびれ部分に、横位の綾くり文が施文されている。

24・30・31の資料は、口縁部を欠いているが、いずれも頸部がくびれ、体部文様は縄文が施文されている。原体は、30・31がLRとなっている。

B V 類：平口縁、外反、頸部に沈線 (37・40)

37は、口縁部上端がつよく外反し、頸部には、巾の広い浅い沈線がひかれている。

B VI a 類：小波状口縁、外反、頸部に沈線 (39)

39は、口唇部が上からの押圧によって小波状を呈しており、頸部には、巾のせまい深い沈線がひかれている。

B VI b 類：小波状口縁、直立、頸部に沈線 (38・42～46)

口唇部が押圧されて小波状口縁となるもの(38・42・43・45・46)と、口縁部の上端が押圧されて小波状口縁となるもの(44)がある。

43と44は、頸部に巾の広い浅い沈線がひかれており、内面に巾の広い沈線がめぐっている。

41は、口縁部を欠いているが、くびれた頸部に巾の広い浅い沈線がひかれている。

<浅鉢形土器> (47～54)

いずれも口縁部資料で、口縁の形状はすべて平口縁である。そのうち50・52には突起がつけられている。口頸部がやや内弯気味に立ち上がるもの(A類)と、やや外反気味に立ち上がるもの(B類)とがある。

A 類：口頸部がやや内弯気味が立ち上がるもの (48・49・51・52・53)。

口縁部がやや内弯気味となり、口縁に沿った平行沈線がひかれるもので、内面に稜を形成するものが多い(48・49・52・53)。

49は肥厚させた口唇部に沈線がつけられている。52は口縁部に頂部が二分された山形の小突起がつけられている。口唇部には沈線がひかれており、突起部分で頂部に抜ける。53は口頸部がやや屈曲している。口縁に沿ってひかれた平行沈線の一部を彫去して、「π」字文状にしてい

る。沈線の中には丹塗りの痕跡がみられる。

B類：口頸部がやや外反気味に立ち上がるもの（47・50・54）。

47・54は口縁に沿って平行沈線がめぐり、内面には一条の沈線がめぐっている。

50は口縁部に頂部が二分された山形の突起がつけられている。口唇部には沈線がひかれており、突起部分で頂部に抜ける。口縁に沿った沈線がひかれ、その下に反転する沈線の入り組んだエ字状文がつけられ、その中に一条の沈線が加えられている。

<壺形土器>（55～62）

61が口縁部資料であるほかは、いずれも頸部から体部にかけての資料と思われる。

57は平行沈線の間、横位沈線の一部を彫去したエ字状文がつけられ、交点部分に粘土による盛り上げを行なっている。61は口縁部資料で、やや外反気味に立ち上がり、口縁に沿った沈線がひかれている。62は肩部資料で、肩部に沿った沈線がひかれ、その下に反転する沈線の入り組んだエ字状文が垂下している。

63は小破片で器形は不明である。細かな刺突文がつけられ、変形エ字文の一種と思われる沈線がひかれている。

<体部資料>（実測図4・69～98）

いずれも深鉢・鉢形土器の体部資料で地文は撚り糸や縄文が施文されている。

69・70、94～96はいずれも、撚り糸によって施文されており、71～75はつよく内湾している。69・70・95の表面にはカーボンの付着が認められる。

76は節の太さの異なるLRとRLの2本の縄文により羽状縄文としている。77も2本の縄文による羽状縄文が菱形に組み合っている。

97・98は口頸部付近の資料と思われ、頸部が無文となっている。

<底部資料>（実測図3・99～109）

99～104は深鉢・鉢形土器の底部と思われる。底面はいずれも無文で、ケズリ調整が行なわれている。実測図3・103は底面に4単位のコブ状の突起がつく鉢形土器と思われる。実測図3は口縁部が欠けているが、内湾気味に立ち上がっている。平行沈線の下半には縄文（LR）が施文され、底部近くはミガキ調整によって無文化している。103は底部近くに巾の広い平行沈線がめぐっている。

105～108は浅鉢形土器の台部資料である。106は坏部の内面底部に棒状施工具によって円文が施文されている。107・108は平行沈線がめぐっているが、108は沈線部分に丹塗りの痕跡がある。

<土製品>（108）

変形エ字文の一種と思われる沈線区画の中に、細かな刺突が施文されている。内面はナデ調整されている。

(3) 第3群土器 (64～68)

弥生時代初頭に位置づけられる土器群。いずれも体部資料である。

64・65・67は、三条の細く深い平行沈線がひかれ、体部文様は縄文が施文されている。68は、二条の平行沈線の間、反転する入り組んだエ字状文がつけられ、その中に一条の沈線が加えられている。

土器の年代について

出土した土器のうち主体となっている第2・3群とした土器についてみると、器種としては深鉢・鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器がある。しかし出土資料のほとんどは破片であり、全体の器形がうかがわれるものは2・3例程度と、十分な観察は行なえなかった。

深鉢・鉢形土器については、口縁部の形態や頸部に無文帯を有するものとそうでないもの等の若干の差異は認められるものの、いずれもいわゆる粗製土器と考えられるものである。

これに対して、浅鉢・壺形土器は深鉢・鉢形土器に比して量的にはかなり少ない。このうち、浅鉢形土器については器形の特徴として、口縁部が内弯気味のものと同外反気味に立ちあがるものがあり、それぞれに台付のものが含まれると考えられる。

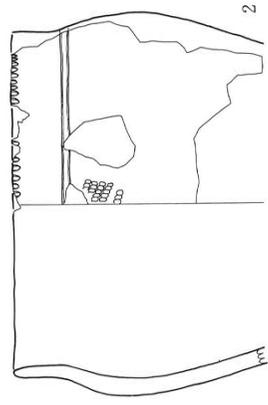
こうした組成や文様の特徴から、これらの土器群については縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭に位置づけられると考える。

本遺跡の遺物包含層は細別では7層に分層でき、このうち1～4層中において土器の集中が認められている。しかし今回の調査は範囲もせまいうえに出土量も少なく、層位的な器種組成の変化や文様構成の変化を把握できるものではなかった。

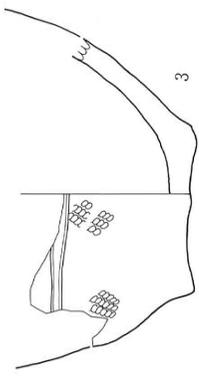
これらの土器群を県内の他遺跡と比較してみると、大洞A'式とされる一迫町山王遺跡第IV層出土土器群や、古川市の宮沢遺跡、若柳町柴の脇遺跡、弥生時代初頭とされる山王遺跡第III層出土土器群、一迫町青木畑遺跡出土の土器に類似している。これらの点から芦見遺跡出土の土器についても、ほぼ同時期に位置づけることができると考える。



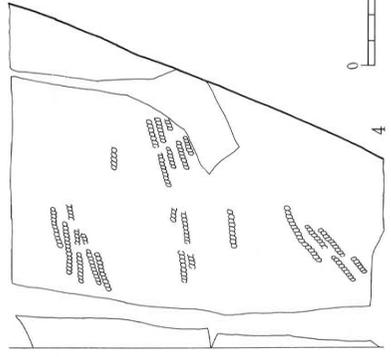
1



2



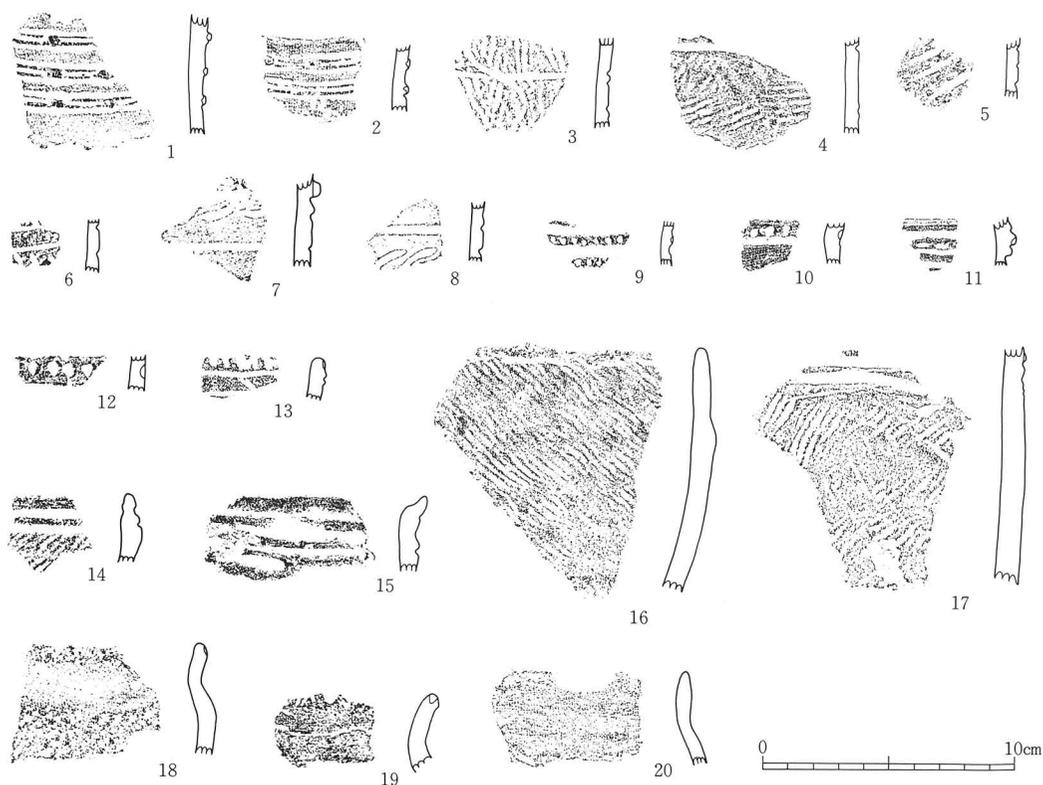
3



4



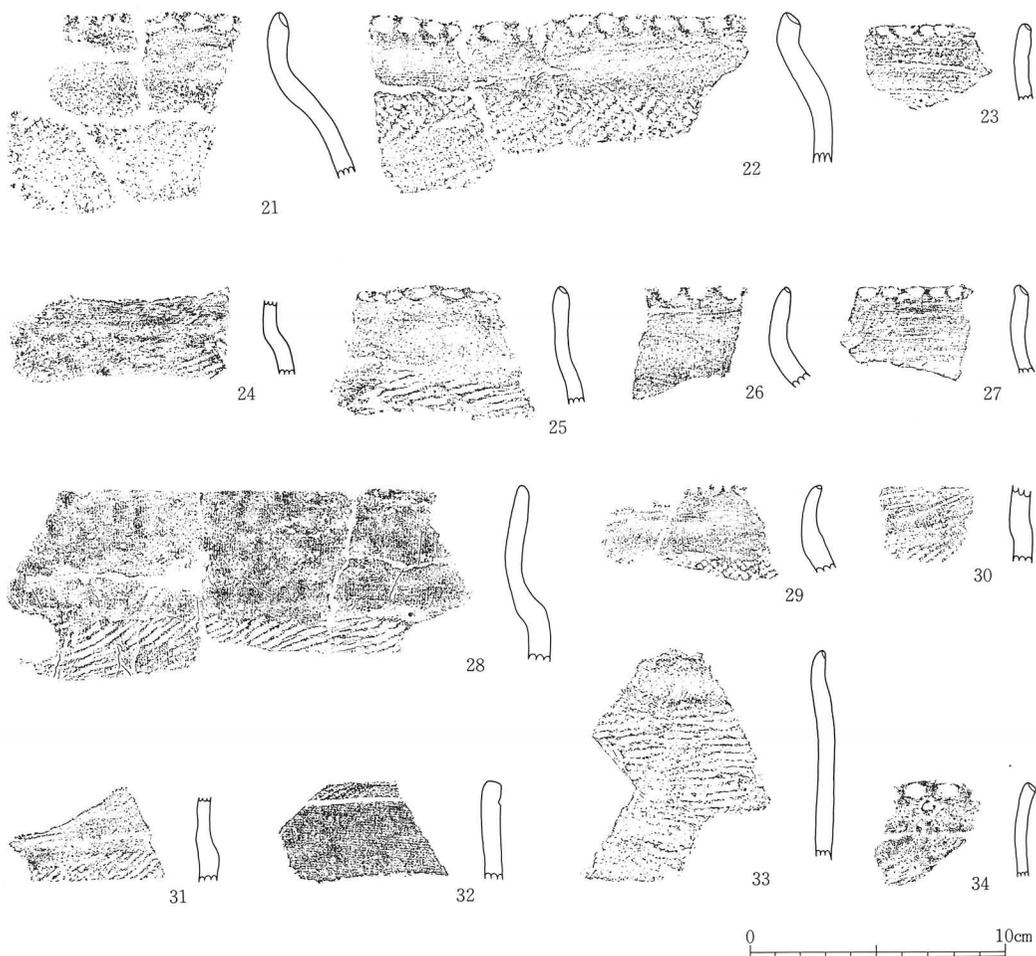
第4図 出土遺物実測土器



第5図 拓本土器(1)観察表

No.	区画	器形	部位	分類	特徴	地文	胎土・色調	備考	写真図版番号
1	B-3 a	深鉢	体部	1 群	細い隆線の貼りつけ、瘤付土器	無文	暗褐色	丹塗り痕	11-1
2	A-3 d	深鉢	体部	1 群	細い隆線の貼りつけ、瘤付土器	無文	暗黄褐色		11-2
3	B-3 b	深鉢	体部	1 群	横位沈線に垂下する沈線が交差	縄文 R L	黄褐色		11-3
4	A-3 d	深鉢	体部	1 群	区画沈線の一部	縄文 R L	暗赤褐色		11-4
5	A-3 c	深鉢	体部	1 群	沈線	無文	黄褐色		11-5
6	A-3 d	深鉢	体部	1 群	沈線	無文	黄褐色		11-6
7	A-3 d	深鉢	体部	1 群	平行沈線・「ノ」字状短沈線・貼り瘤	無文	黄褐色	同一個体か	11-7
8	B-4 a	深鉢	体部	1 群	沈線・「ノ」字状短沈線	無文	黄褐色		11-8
9	A-3 d	深鉢	体部	1 群	沈線により隆帯化した部分に刺突文	無文	暗黄褐色		11-9
10	B-3 b	深鉢	体部	1 群	沈線・刺突文	無文	暗赤褐色		11-10
11	B-3 b	深鉢	口縁部	1 群	平行沈線間に横位の刻み目	無文	暗赤褐色		11-11
12	B-2 c	深鉢	体部	1 群	縦位の刺突文	無文	暗褐色		11-12
13	B-4 a	深鉢	口縁部	1 群	口唇部に縦位の刻み目・区画沈線	無文	明黄褐色		11-13
14	B-2 b	深鉢・鉢	口縁部	B I 類	区画沈線・内面に低い稜がつく	縄文	暗赤褐色		11-16
15	B-3 b	深鉢・鉢	口縁部	B I 類	区画沈線	無文	暗赤褐色		11-17
16	D-3 d	深鉢・鉢	口縁部	B 群	折り返し口縁	縄文 R L	暗褐色		11-14
17	B-3 a	深鉢・鉢	口縁部	B 群	口縁沈線・細い隆線	縄文 R L	黄褐色		11-15
18	B-3 a	深鉢・鉢	口縁部	B III a 類	口唇部側面押圧	縄文	黄褐色		11-18
19	B-3 c	深鉢・鉢	口縁部	B II a 類	頂部に刻み目の入った小突起	無文	暗褐色		11-20
20	B-3 a	深鉢・鉢	口縁部	B II b 類		無文	暗褐色		11-21

第5図 出土遺物・土器(1)



第6図 拓本土器(2)観察表

No	区画	器形	部位	分類	特徴	地文	胎土・色調	備考	写真図版番号
21	B-3c	深鉢・鉢	口縁部	B III a 類	口唇部側面押圧	縄文	暗褐色・小砂粒	頸部無文	11-19
22	B-3a	深鉢・鉢	口縁部	B III a 類	口唇部側面押圧	縄文LR	暗褐色・小砂粒	頸部無文	12-22
23		深鉢・鉢	口縁部	B III a 類	口唇部押圧	無文	明黄褐色	頸部無文	12-23
24	B-3b	深鉢・鉢	口頸部		頸部無文	縄文	明黄褐色		12-25
25	D-3d	深鉢・鉢	口縁部	B III a 類	口唇部押圧により小波状口縁を呈する	縄文	暗黄褐色	頸部無文	12-26
26	B-3c	深鉢・鉢	口縁部	B III a 類	口唇部押圧により小波状口縁を呈する	無文	暗黄褐色	頸部無文	12-24
27	B-3b	深鉢・鉢	口縁部	B III a 類	口唇部押圧により小波状口縁を呈する	無文	暗黄褐色	頸部無文	12-27
28	B-3b	深鉢・鉢	口縁部	B IV 類	頸部無文	縄文LR	赤褐色		12-28
29	A-3c	深鉢・鉢	口縁部	B III a 類	口唇部に縦位の細い刻み目	縄文LR	暗褐色	頸部無文	12-30
30	B-3c	深鉢・鉢	口頸部		頸部無文	縄文LR	黄褐色		12-29
31	A-3d	深鉢・鉢	口頸部		頸部無文	縄文LR	黒褐色		12-31
32	B-2c	深鉢・鉢	口縁部	B IV 類	口唇部下に沈線がめぐり、縄文充填	無文	黄褐色		12-32
33	B-3b	深鉢・鉢	口縁部	B III a 類	口唇部押圧により小波状口縁を呈する	縄文	赤褐色		12-34
34	A-3c	深鉢・鉢	口縁部	B III b 類	口唇部側面押圧により小波状口縁を呈する	無文	黒褐色		12-33

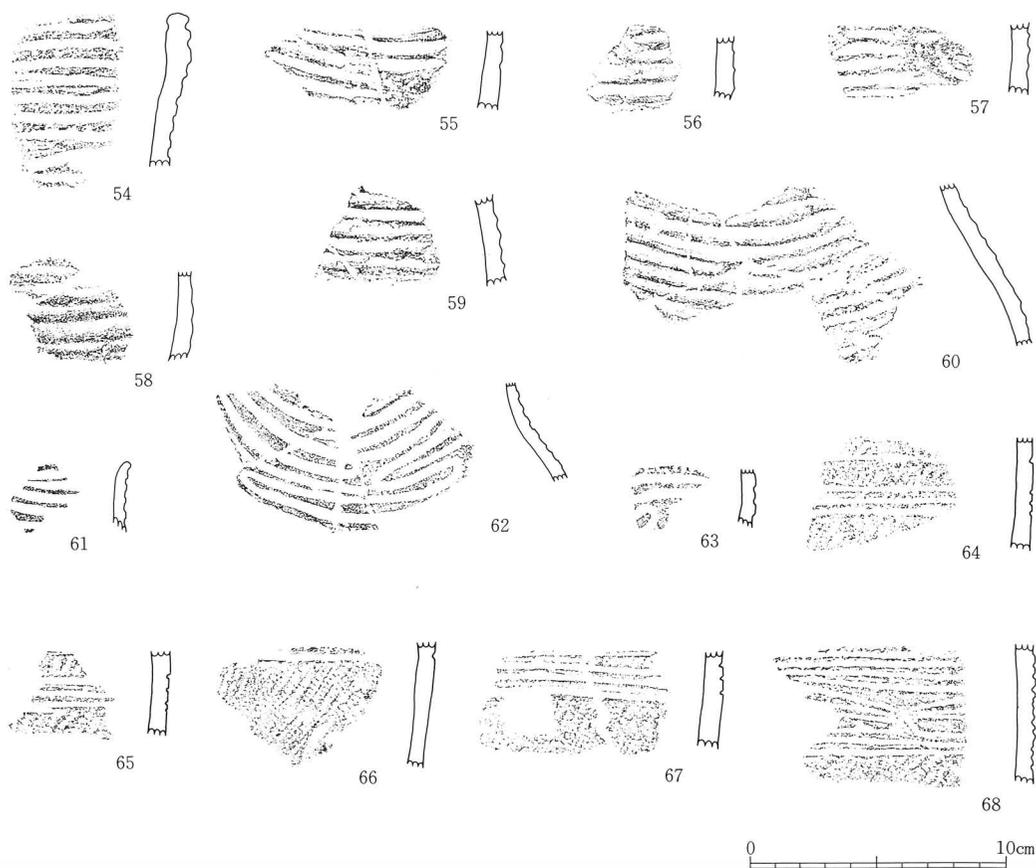
第6図 出土遺物・土器(2)



第7図 拓本土器(3)観察表

No	区画	器形	部位	分類	特徴	地文	胎土・色調	備考	写真図版番号
35	B-3 b	深鉢・鉢	口縁部	B IV 類	頭部に横位の綾くり文		外面-暗黄褐色 内面-暗褐色		12-35
36	A-3 d	深鉢・鉢	口縁部	B IV 類		無文	暗黄褐色・小砂粒		13-36
37	A-3 c	深鉢・鉢	口縁部	B V 類	横位の幅の広い平行沈線		暗褐色・小砂粒		13-37
38	B-3 d	深鉢・鉢	口縁部	B IV b 類	口唇部押圧により小波状口縁・平行沈線		暗褐色・小砂粒		13-38
39	B-3 d	深鉢・鉢	口縁部	B IV b 類	口唇部押圧により小波状口縁・平行沈線		暗褐色・小砂粒		13-39
40	表 採	深鉢・鉢	口縁部	B V 類	横ナデによる隆線	無文	外面-暗褐色 内面-赤褐色		13-40
41	B-3 a	深鉢・鉢	体 部		幅の広い沈線	無文	暗黄褐色・小砂粒		13-41
42	B-3 d	深鉢・鉢	口縁部	B IV b 類	口唇部押圧により小波状口縁・平行沈線		暗褐色・小砂粒		13-42
43	B-3 a	深鉢・鉢	口縁部	B IV b 類	口唇部押圧により小波状口縁内面に幅広の沈線		暗褐色・小砂粒		
44	B-3 a	深鉢・鉢	口縁部	B IV b 類	口唇部押圧により小波状口縁内面に幅広の沈線		暗黄褐色・小砂粒		13-44
45	A-3 a	深鉢・鉢	口縁部	B IV b 類	口唇部押圧により小波状口縁		暗褐色・小砂粒		13-45
46	B-3 d	深鉢・鉢	口縁部	B IV b 類	口唇部押圧により小波状口縁		暗黄褐色・小砂粒		13-46
47	C-6	浅 鉢	口縁部	B II a 類	口縁に沿って平行沈線・内面に沈線		黒褐色・小砂粒		13-47
48	A-3 d	浅 鉢	口縁部	A II a 類	口縁に沿って平行沈線・内面に稜		暗灰色・小砂粒		13-48
49	A-3 c	浅 鉢	口縁部	A II a 類	口縁に沿って平行沈線・内面に稜		暗黄褐色・小砂粒		13-49
50	A-3 c	浅 鉢	口縁部	B I b 類	頂部に刻み目の入った山形突起・工字状文		暗黄褐色・小砂粒		13-51
51	B-2 b	浅 鉢	口縁部	A II b 類	口縁に沿った平行沈線		黒褐色・小砂粒		13-50
52	B-3 a	浅 鉢	口縁部	A I a 類	頂部に刻み目の入った山形突起		赤褐色・緻密		13-52
53	A-3 d	浅 鉢	口縁部	A II a 類	口縁に沿った沈線の一部を彫去した「π」字状文		赤褐色・緻密	丹塗り痕	13-53

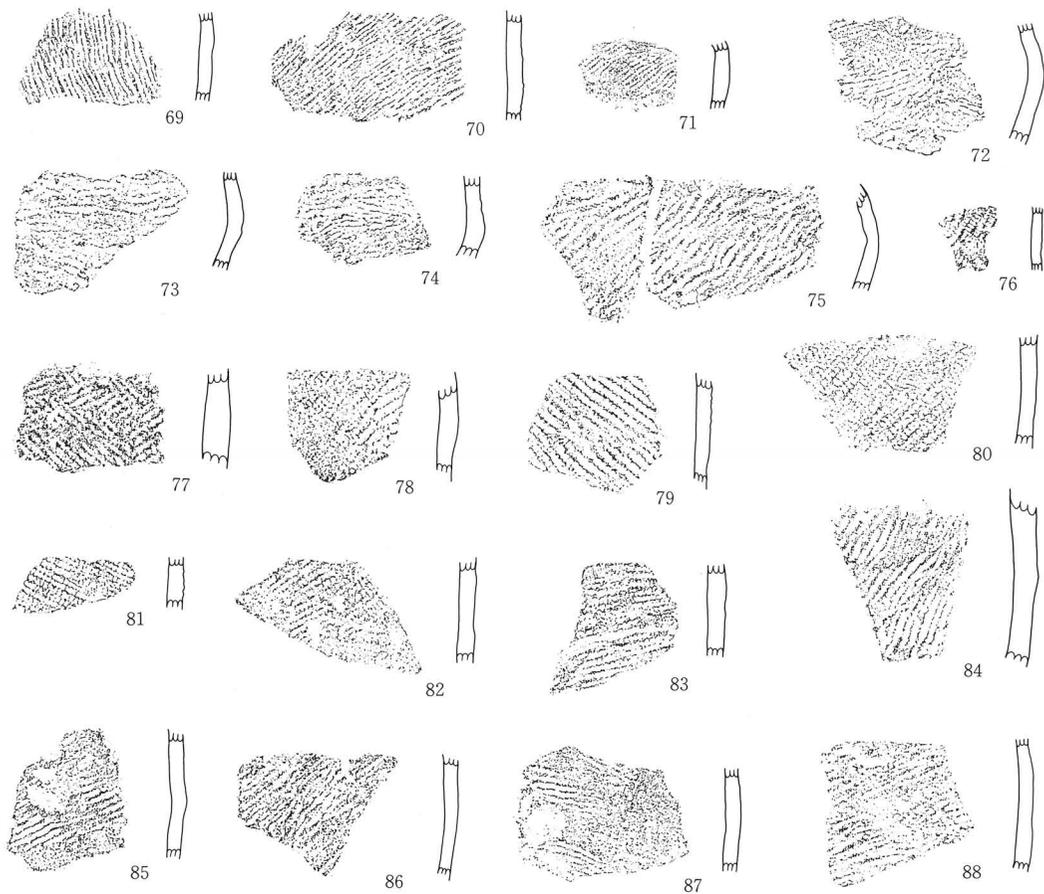
第7図 出土遺物・土器(3)



第8図 拓本土器(4)観察表

No	区画	器形	部位	分類	特徴	地文	胎土・色調	備考	写真図版番号
54	B-2 b	浅鉢	口縁部	B II 類	平行沈線		暗黄褐色・小砂粒		13-54
55	A-3 d	壺	体部		幅広の浅い平行沈線		黄褐色・小砂粒		13-55
56	A-3 d	壺	体部		平行沈線の一部を彫去した工字状文		外面-黒褐色 内面-赤褐色		14-56
57	A-3 d	壺	体部		平行沈線の一部を彫去した工字状文		外面-黒褐色 内面-赤褐色		14-57
58	A-3 d	壺	体部		幅広の浅い平行沈線		暗赤褐色・小砂粒		14-58
59	A-3 d	壺	体部		幅広の浅い平行沈線		外面-黒褐色 内面-赤褐色		14-59
60	A-3 d	壺	体部		幅広の浅い沈線		赤褐色・小砂粒		14-60
61	B-3 a	壺	口縁部		平行沈線		黄褐色・小砂粒		14-62
62	表 採	壺	体部		沈線の下部に反転する沈線の入組んだ工字状文		暗黄褐色・小砂粒		14-61
63	A-3 d	壺	体部		平行沈線の一部にループ状沈線・刺突文		暗褐色・小砂粒		14-63
64	B-4 a	深鉢・鉢	体部	3 群	三本を単位とする沈線	縄文 L R	暗褐色・小砂粒		14-64
65	B-4 a	深鉢・鉢	体部	3 群	三本を単位とする沈線	縄文 L R	暗褐色・小砂粒		14-65
66	B-4 a	深鉢・鉢	体部	3 群	沈線	縄文 L R	暗褐色・小砂粒		14-66
67	B-3 b	深鉢・鉢	体部	3 群	三本を単位とする沈線	縄文 L R	暗褐色・小砂粒	一部にカーボン付着	14-67
68	表 採			3 群	二本を単位とする沈線間に反転する沈線の入組んだ工字状文・その中に一条の沈線	縄文 L R	暗褐色・小砂粒		14-68

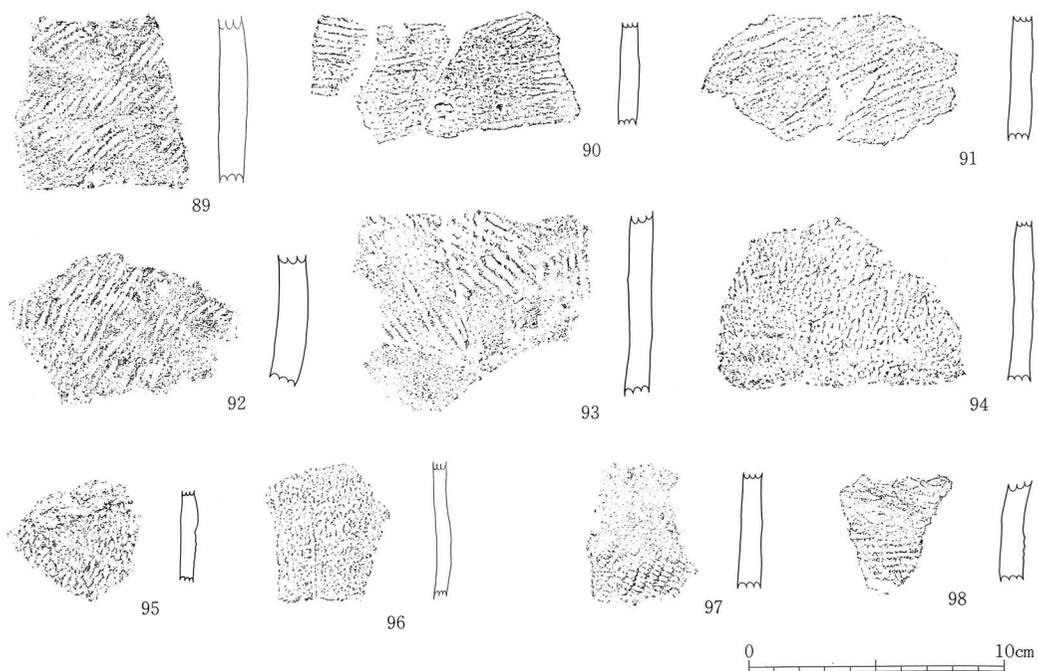
第8図 出土遺物・土器 (4)



第9図 拓本土器(5)観察表

No	区画	器形	部位	分類	特 徴	地 文	胎土・色調	備 考	写真図版番号
69	B-3 b	深鉢・鉢	体部	B 群		撚り糸文	暗灰色	カーボン付着	15-69
70	A-3 c	深鉢・鉢	体部	B 群		撚り糸文	暗灰色	カーボン付着	15-70
71	表 探	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文LR	暗黄褐色		15-71
72	B-3 b	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文	暗褐色		15-72
73	B-3 d	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文	暗黄褐色		15-73
74	B-4 a	深鉢・鉢	体部	B 群		撚り糸文?	暗褐色		15-74
75	B-3 a	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文LR	暗黄褐色		15-75
76	A-3 d	深鉢・鉢	体部	B 群	LR・RLの2本の原体による羽状縄文		暗黄褐色		15-76
77	B-2 b	深鉢・鉢	体部	B 群	LR・RLの2本の原体を菱形に施文		黄褐色		15-77
78	B-3 b	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文LR	黄褐色		15-78
79	E-3 b	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文LR	黄褐色		15-79
80	B-4 a	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文LR	黒褐色		15-80
81	B-2 b	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文LR	黄褐色		15-81
82	A-3 c	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文LR	黄褐色		15-82
83	A-3 c	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文LR	黄褐色		15-83
84	B-3 b	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文	黄褐色		15-84
85	B-3 b	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文	暗黄褐色		15-86
86	A-3 c	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文	暗黄褐色		15-85
87	B-4 d	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文	暗黄褐色		16-87
88	A-3 d	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文	明黄褐色		16-88

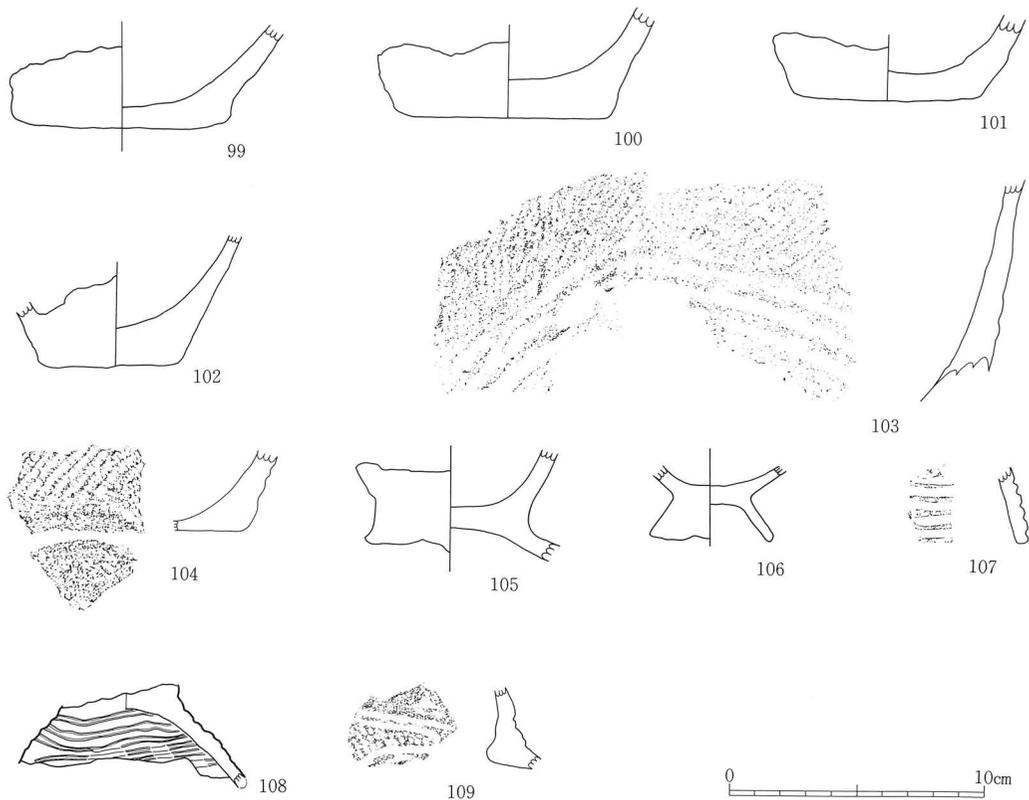
第9図 出土遺物・土器(5)



第10図 拓本土器(6)観察表

No	区画	器形	部位	分類	特 徴	地 文	胎土・色調	備 考	写真図版番号
89	B-3 b	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文LR	黄褐色		16-89
90	A-3 d	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文	黒褐色		16-90
91	A-3 d	深鉢・鉢	体部	B 群		無節	暗褐色		16-91
92	A-3 d	深鉢・鉢	体部	B 群		縄文	暗黄褐色		16-92
93	B-3 a	深鉢・鉢	体部	B 群		無節	赤褐色		16-94
94	B-3 b	深鉢・鉢	体部	B 群		撚り糸	暗黄褐色		16-93
95	表 採	深鉢・鉢	体部	B 群		撚り糸	黄褐色	カーボン付着	16-95
96	B-3 b	深鉢・鉢	体部	B 群		撚り糸	黄褐色		16-96
97	B-3 b	深鉢・鉢	口頸部	B 群		縄文LR	暗灰色		16-97
98	B-3 c	深鉢・鉢	口頸部	B 群		縄文LR	暗褐色		16-98

第10図 出土遺物・土器(6)



第11図 拓本土器(7)観察表

No	区画	器形	部位	分類	特 徴	地 文	胎土・色調	備 考	写真図版番号
99	A-3 d	深鉢	底部		底面ケズリ調整		暗黄褐色		17-99
100	B-4 a	深鉢	底部		底面ケズリ調整		暗黄褐色・砂粒多		17-100
101	B-4 d	深鉢	底部		底面ケズリ調整		暗黄褐色		17-101
102	表 探	深鉢	底部		底面ケズリ調整		褐色		17-102
103	A-3 d	鉢	底部		底面にコブ状の突起(4単位?)	縄文LR	黄褐色		17-105
104	E-4 b	深鉢	底部		底面ケズリ調整	縄文LR	内外面赤褐色		17-103
105	B-3 a	台付浅針	台部	C 類	ミガキ調整	無文	明褐色		17-104
106	B-3 b	台付浅針	台部	C 類	坏部内面底部に沈線による円文	無文	暗黄褐色		17-106
107	E-3 b	台付浅針	台部	C 類	平行沈線		淡黄色		17-108
108	F-3	台付浅針	台部	C 類	平行沈線		暗黄褐色・小砂粒	丹塗り痕	17-107
109	B-4 a	土製品			沈線区画の中に刺突文		外面-暗黄褐色 内面-黒褐色	内面調整	17-109

第11図 出土遺物・土器(7)

2. 石器と石製品

石鏃（第12図1 図版18-1）

扁平で鋭い先端部をもつ小形の石器で、1点出土している。形状は柳葉型である。二次加工が全面に及び、素材面は確認できない。

ポイント（第12図4 図版18-4）

扁平で鋭い先端部をもち、石鏃より厚く重量のある石器で、1点出土している。剝片を素材とする。有茎で茎部は両面加工により作り出されている。先端部は背面の1側辺を除き二次加工が施されている。

篋状石器（第12図2 図版18-2）

基部側から刃部にかけて両側辺が平行あるいは広がる石器で、1点出土している。剝片を素材とし、その打面部を基部としている。刃部、側辺部ともに両面加工が施されているが、刃部はより細かな二次加工で作られている。

二次加工ある石器（第12図3・6 第13図10 図版18-3・6・10）

第12図3は、剝片の縁辺に連続的に二次加工を施したものである。打面部は除去されている。打面部側と末端部側の両縁辺に両面加工が施され、ともに一部が鋸歯線に近い形状をしている。また、両者の縁辺は鋭角に交わり尖頭部を作り出しているようにも理解される。

第12図6、第13図10は、剝片の縁辺に散発的に二次加工の施されたものである。6は背面側の左側辺部に二次加工がみられる。10は背面の末端部と腹面の左側边上端部に二次加工がみられる。

剝片（第12図5・7 第13図8・9 図版18-5・7・8・9）

4点出土している。すべて流紋岩である。

石核（第13図11・12、第14図13・14・15、図版18-11・12、図版19-13・14・15）

ネガティブバルブをもつ剝離面で構成される石器で、それらから剝離された破片が石器の素材となったと推定させるものである。5点出土している。石材は黒耀石、珪質頁岩、珪質凝灰岩で、流紋岩が欠如している。素材は剝片、粗割片、礫である。11は剝片を素材としてその折断面を打面に剝片を剝離している。12も剝片を素材として背面側と主な剝離作業面としている。13は粗割片を素材とする。14も粗割片を素材としほぼ全面に剝離作業が及んでいる。15は礫を素材とし、主に片面を剝離作業面としている。

石錘（第15図16 図版19-16）

扁平な礫の両端を加工し抉り部を作り出したもので1点出土している。

凹石・磨石類（第15図17・18・19、図版19-17・18・19）

円礫を素材とし、凹痕、磨痕が認められる石器で、3点出土している。17、19は磨痕をもつ

ものである。18は凹痕と磨痕をもつものである。

石棒（第15図20 図版19-20）

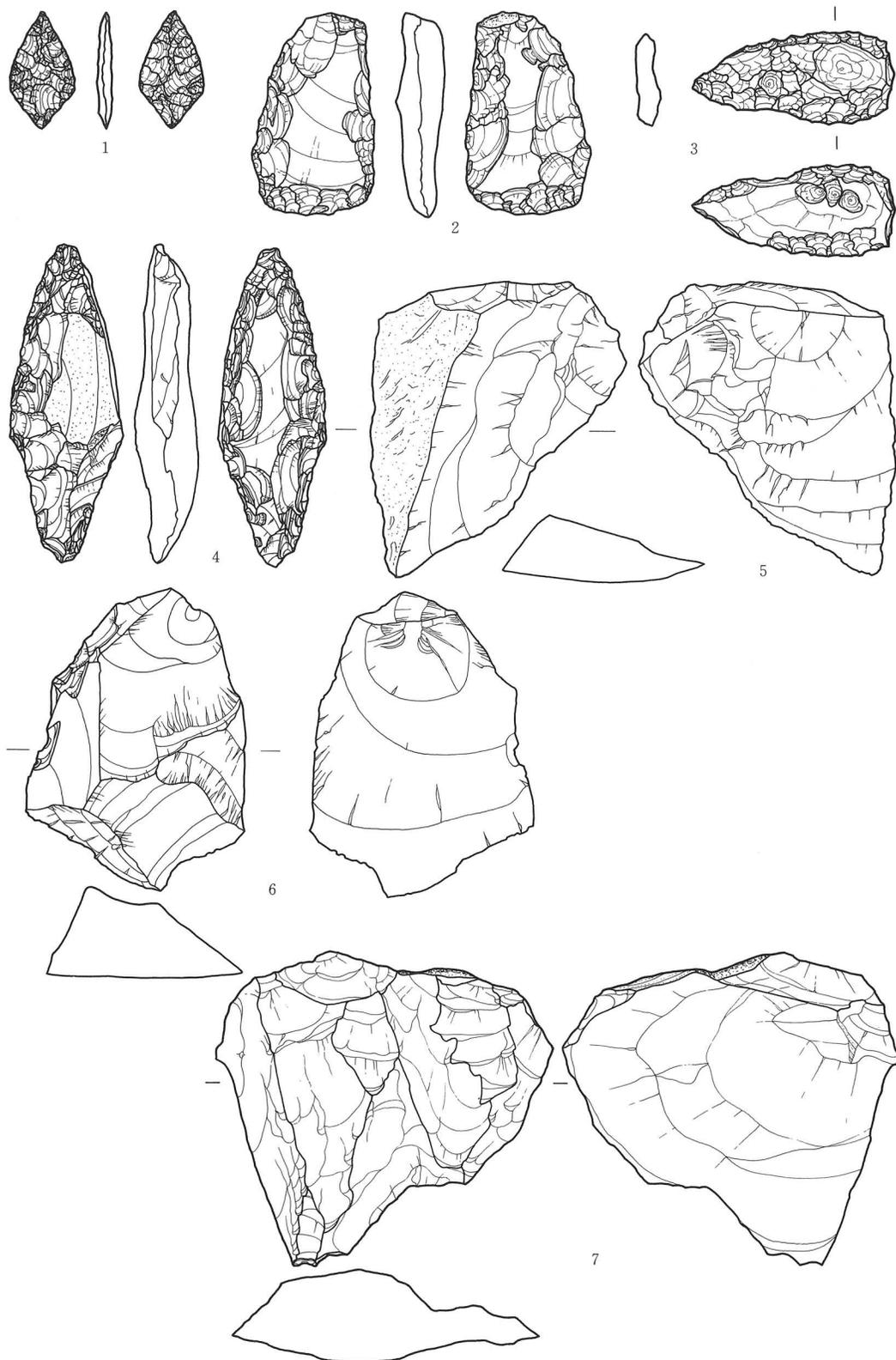
両端に頭部をもち断面が円形で棒状を呈するもので1点出土している。全面敲打により整形されているが一部研磨されているところもある。

V. まとめ

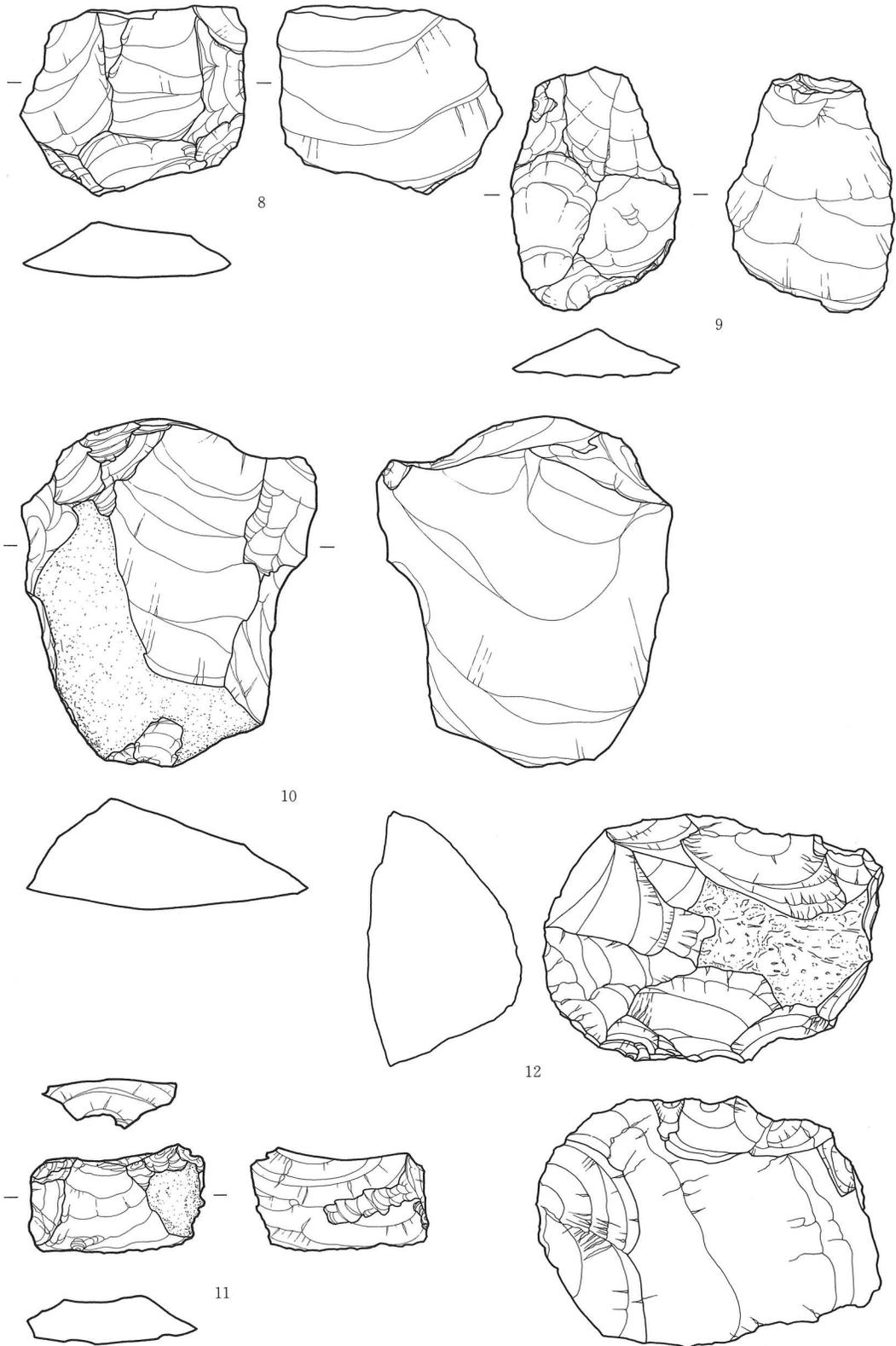
1. 芦見遺跡は蕃山丘陵の西端、芦見沼から流れでる小河川の左岸に位置している。
2. 今回の調査において発見された遺構はないが、分布調査時に製鉄関連遺構の一部と思われる焼土が確認されたほか、鉄滓が出土している。また、縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての遺物包含層を確認した。
3. 遺物包含層は、調査区西端の凹地に北側から流れこむように確認されている。このため今回の調査地点の北側に遺跡の主体部があったと思われる。
4. 発見された遺物としては、縄文土器・弥生土器・石器・石製品がある。土器は縄文時代晩期大洞A'式期～弥生時代初頭山王III層式が主体となっている。石器・石製品としては、両頭の石棒・石鏃などがある。

第1表 石器観察表

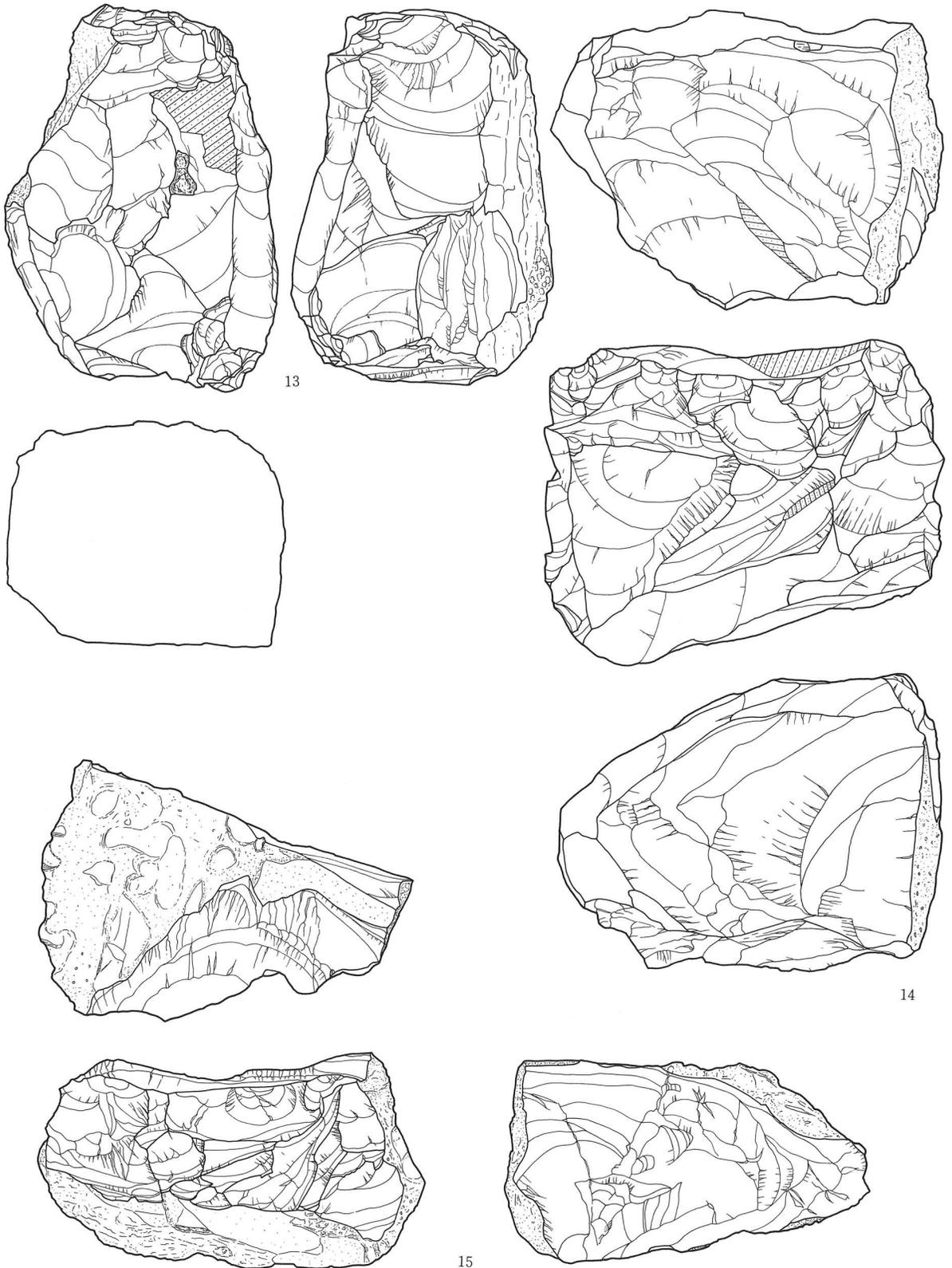
No	器種	出土地点	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	打面	素材	背面構成	備考
1	石鏃		玉髓	26.8	14.7	3.2	1.1					
2	籠状石器		頁岩	47.5	29.3	9.1	13.3	110°	1	剥片	I	
3	二次加工ある石器		鉄石英	46.2	21.9	5.4	6.9			剥片		火熱によるはじけあり
4	ポイント		頁岩	73.4	24.6	13.9	22.2			剥片	自	
5	剥片		流紋岩	60.1	60.4	33.1	80.9	94°	1		自+I+II	
6	二次加工ある石器		流紋岩	63.0	49.6	24.6	58.2	124°	1	剥片	I+II+III+IV	
7	剥片		流紋岩	62.5	72.5	24.3	100.9	114°	自+1		I+III	
8	剥片		流紋岩	(42.9)	51.4	15.1	33.9				I+II+III	打面側歯欠
9	剥片		流紋岩	53.2	39.0	12.0	17.7	106°	1		I+III	
10	二次加工ある石器		珪質凝灰岩	75.5	68.0	27.0	128.1	111°	2	剥片	自+I+II+IV	
11	石核		黒曜石	24.3	40.8	12.4	12.7			剥片		
12	石核		珪質凝灰石	57.0	73.6	32.3	141.1			剥片		
13	石核		頁岩	95.0	63.0	53.0	442.9			粗剥片		
14	石核		珪質凝灰岩	92.8	75.8	68.8	590.5			粗剥片		
15	石核		頁岩	53.5	94.3	66.5	240.7			礫		
16	石錘		安山岩	58.8	60.0	20.3	79.9			礫		
17	凹石・磨石類		安山岩	66.0	58.8	45.0	235.8					磨痕のみ
18	凹石・磨石類		安山岩	88.0	84.0	55.0	549.6					凹痕と磨痕
19	凹石・磨石類		安山岩	113.0	88.0	56.0	790.8					磨痕のみ
20	石棒		凝灰岩	312.0	51.0	46.0	1057.3					



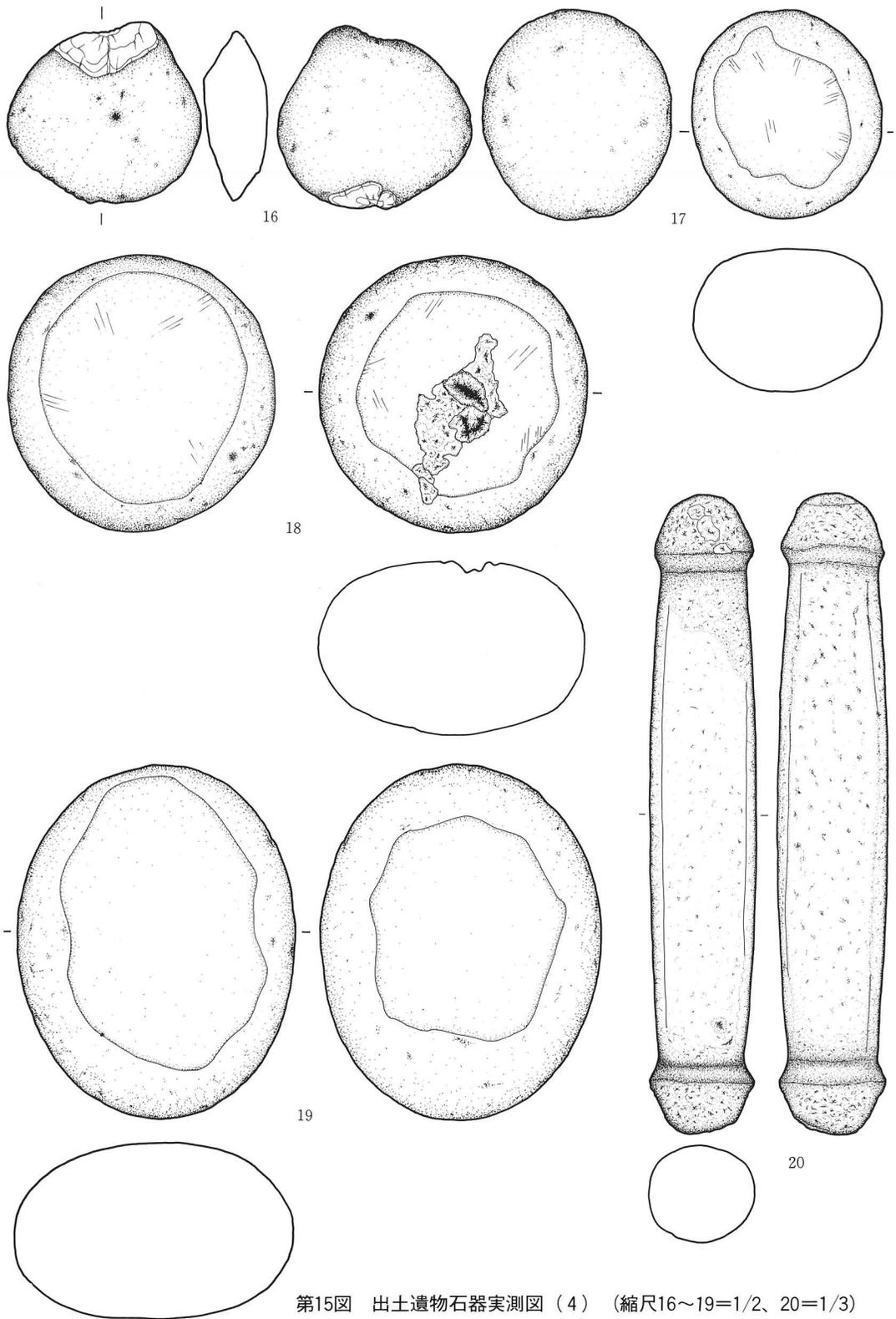
第12図 出土遺物石器実測図(1) (縮尺2/3)



第13図 出土遺物石器実測図(2) (縮尺2/3)



第14図 出土遺物石器実測図(3) (縮尺2/3)



第15図 出土遺物石器実測図(4) (縮尺16~19=1/2、20=1/3)

引用参考文献

- 宮城県教育委員会 (1980) 「玉造遺跡」 宮城県文化財調査報告書第68集
- 宮城県教育委員会 (1980) 「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－宮沢遺跡－」 宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会 (1982) 「青木畑遺跡」 宮城県文化財調査報告書第85集
- 宮城県教育委員会 (1984) 「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ－二屋敷遺跡－」 宮城県文化財調査報告書第99集
- 宮城県教育委員会 (1985) 「香ノ木遺跡」 宮城県文化財調査報告書第103集
- 宮城県教育委員会 (1986) 「塩釜市新浜遺跡」 宮城県文化財調査報告書第113集
- 宮城県教育委員会 (1986) 「亙理町畑中貝塚」 宮城県文化財調査報告書第115集
- 宮城県教育委員会 (1986) 「若柳町柴の脇遺跡」 宮城県文化財調査報告書第119集
- 宮城県教育委員会 (1987) 「七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－小梁川遺跡－」 宮城県文化財調査報告書第122集
- 仙台市教育委員会 (1983) 「茂庭」 仙台市文化財調査報告書第45集
- 角田市教育委員会 (1976) 「梁瀬浦遺跡」 角田市文化財調査報告書第1集
- 一迫町教育委員会 (1985) 「山王冨遺跡調査図録」
- 伊東信雄 (1981) 「宮城県史34 史料集V 考古資料」
- 林 謙作 (1965) 「縄文文化の発展と地域性－東北－」 日本の考古学Ⅱ
- 須藤 隆 (1987) 「東日本における弥生文化の受容」 考古学雑誌
- 工藤竹久 (1987) 「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」 考古学雑誌

引用参考文献 (宮城地区発掘調査関係)

1. 宮城町教育委員会・志間泰治 (1973) 「宮城町想海塚発掘報告」 宮城町文化財調査報告書第1集
2. 宮城町文化財保護委員会 (1977) 「宮城町の文化財」 宮城町文化財調査報告書第2集
3. 宮城町誌編纂委員会 (1967) 「宮城町誌－資料編」
4. 宮城町誌編纂委員会 (1969) 「宮城町誌－本編」
5. 宮城町教育委員会 (1981) 「御殿館跡」 宮城町文化財調査報告書第3集
6. 宮城町教育委員会 (1984) 「蒲沢山遺跡－遺跡詳細分布調査」 宮城町文化財調査報告書第4集
7. 宮城町教育委員会 (1986) 「宮城町の文化財 (改訂版)」 宮城町文化財調査報告書第5集
8. 阿部恵・今野隆他 (1986) 「宮城町観音堂遺跡・新宮前遺跡」 宮城県文化財調査報告書第118集
9. 藤沼邦彦・斎藤吉弘他 (1987) 「宮城町西館跡」 宮城県文化財調査報告書第123集
10. 狩野正昭・真山悟 (1982) 「農学寮跡遺跡－遺跡詳細分布調査報告書」 宮城県文化財調査報告書第86集
11. 阿部 恵 (1980) 「権現森遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」 宮城県文化財調査報告書第71集

写 真 图 版



写真1
調査区伐採状況



写真2
遺跡遠景
(南東から)



写真3
調査風景

写真 4
遺物出土状況
(包含層中・東から)

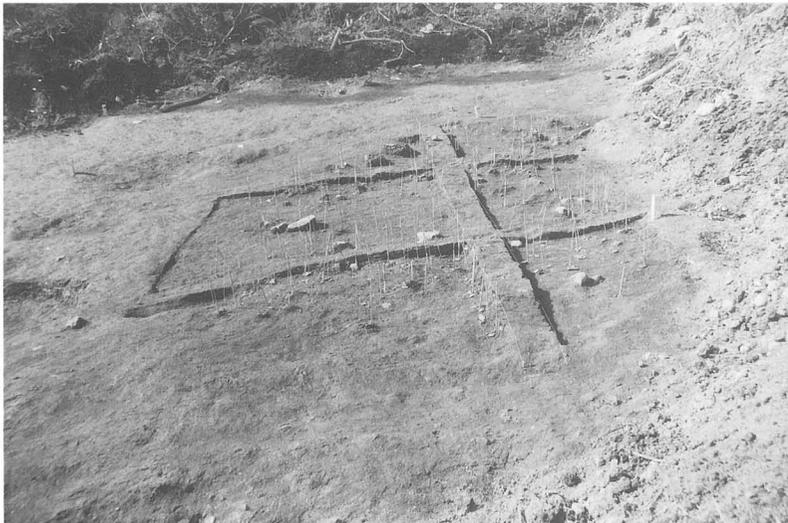


写真 5
遺物出土状況
(包含層中・北から)

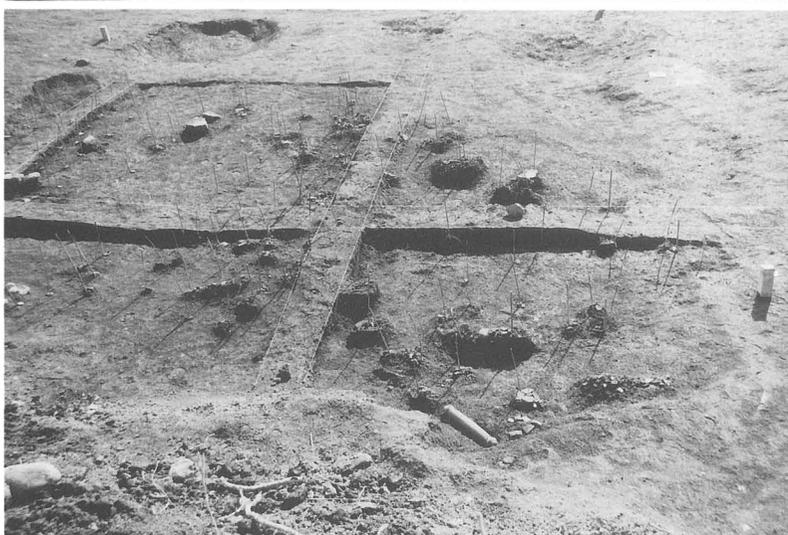


写真 6
遺物出土状態



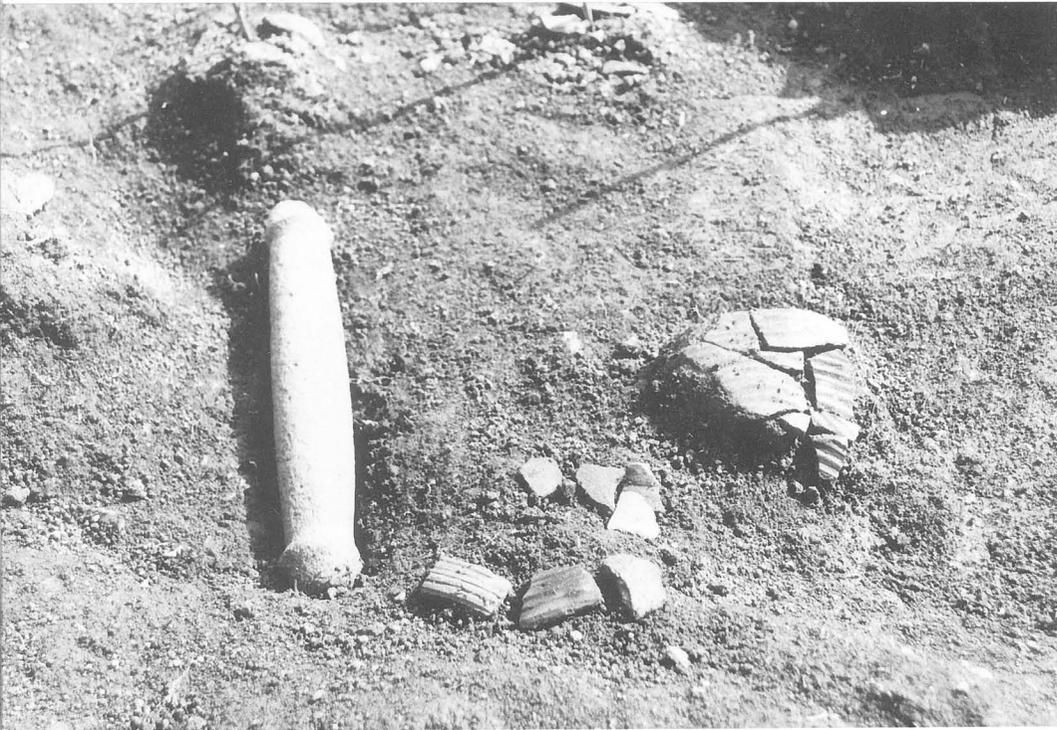


写真7
石棒出土状態

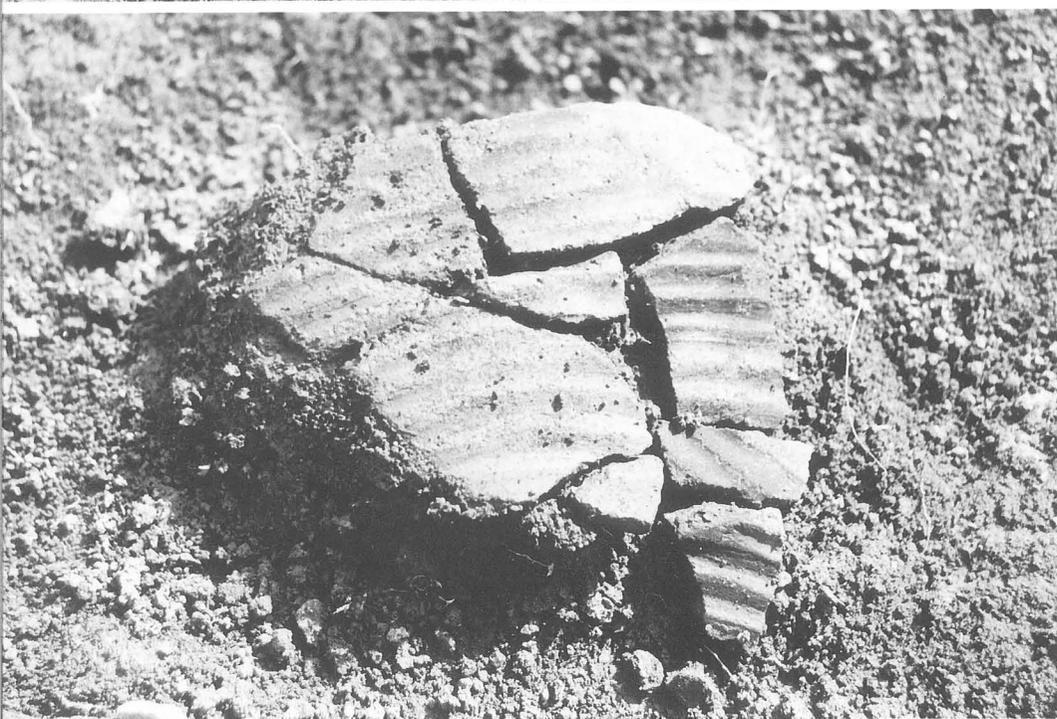
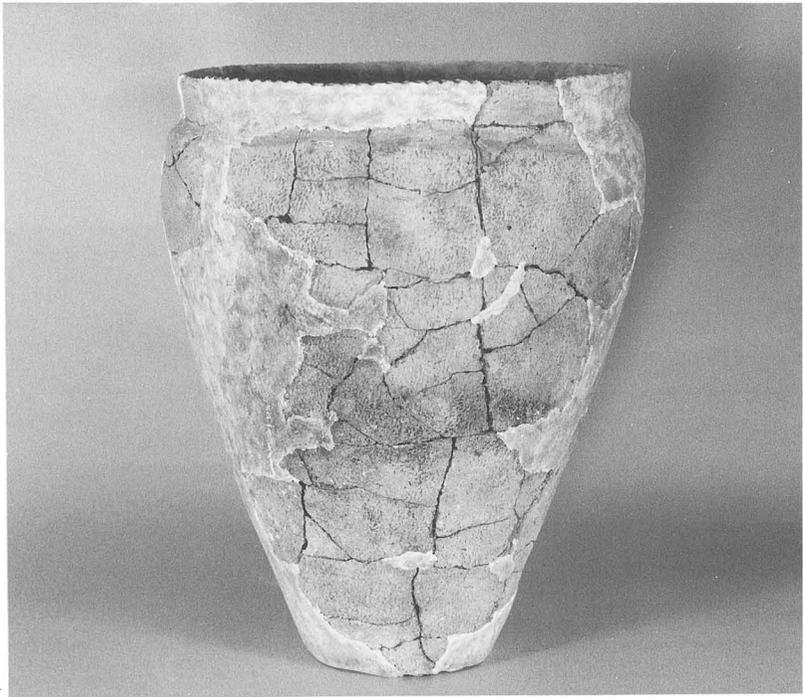


写真8
遺物出土状態



写真9
遺物包含層完掘状況
(東から)



1



2



3



4

写真10 復元土器

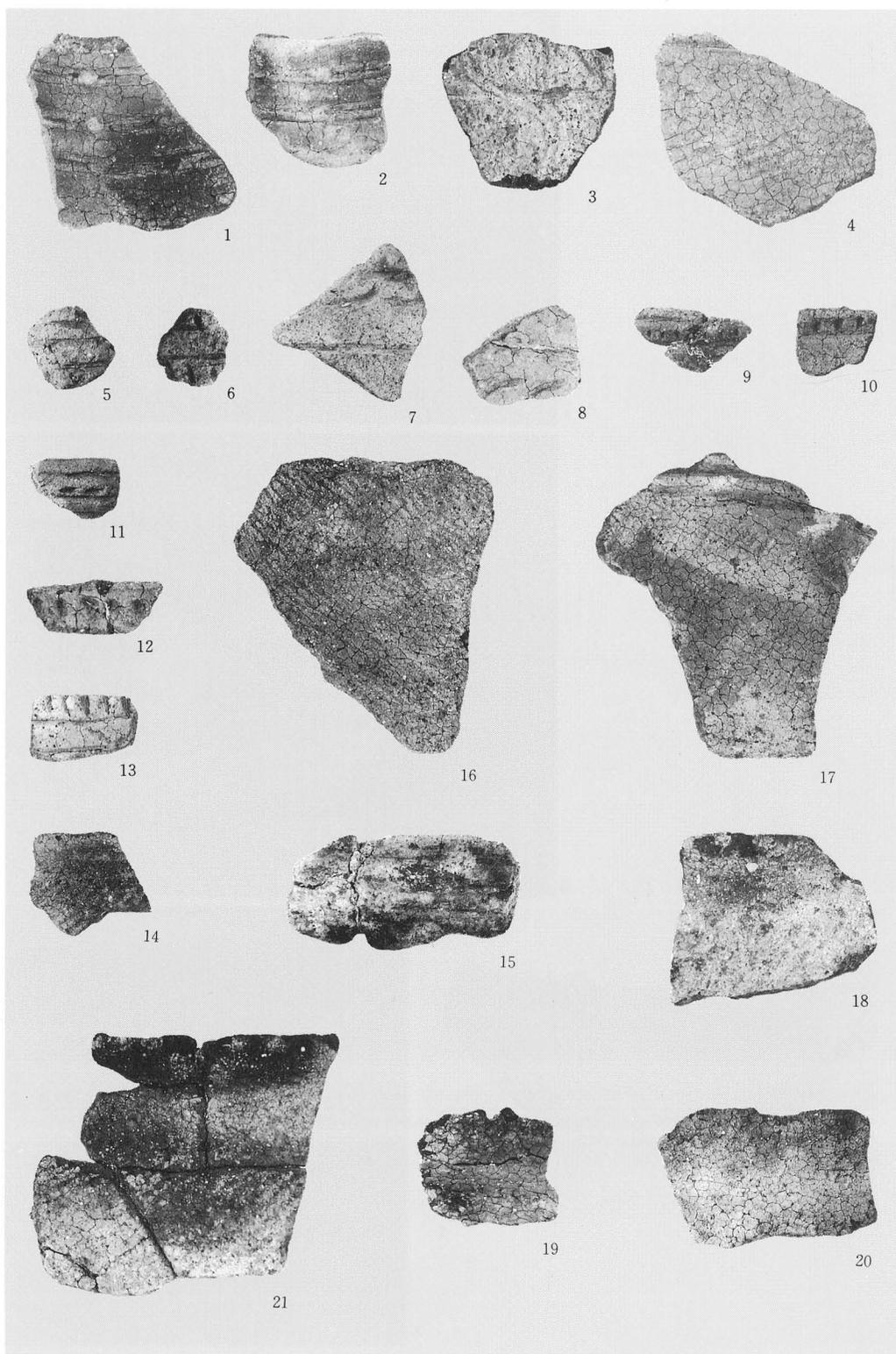


写真11 拓本土器 (1)

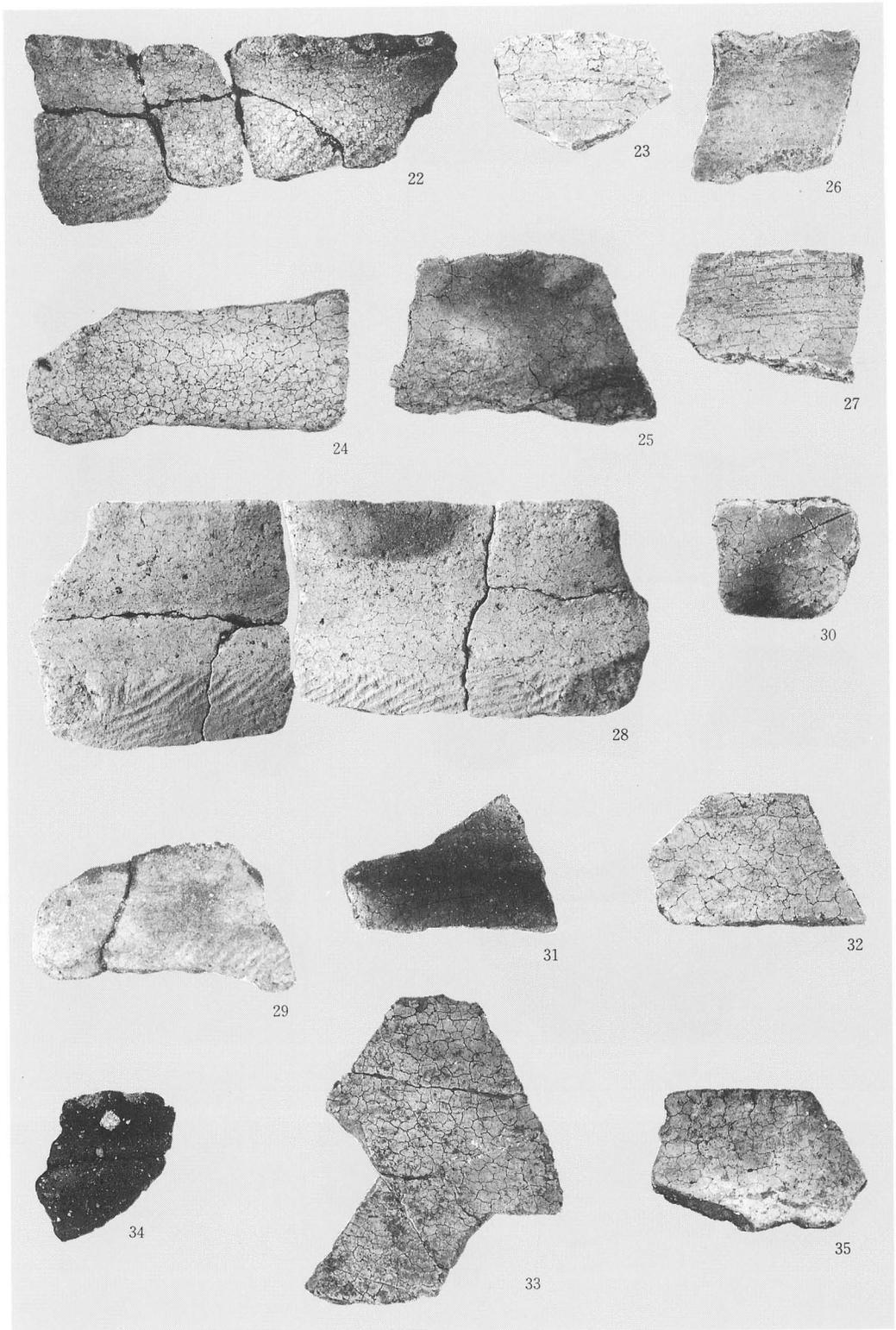


写真12 拓本土器 (2)

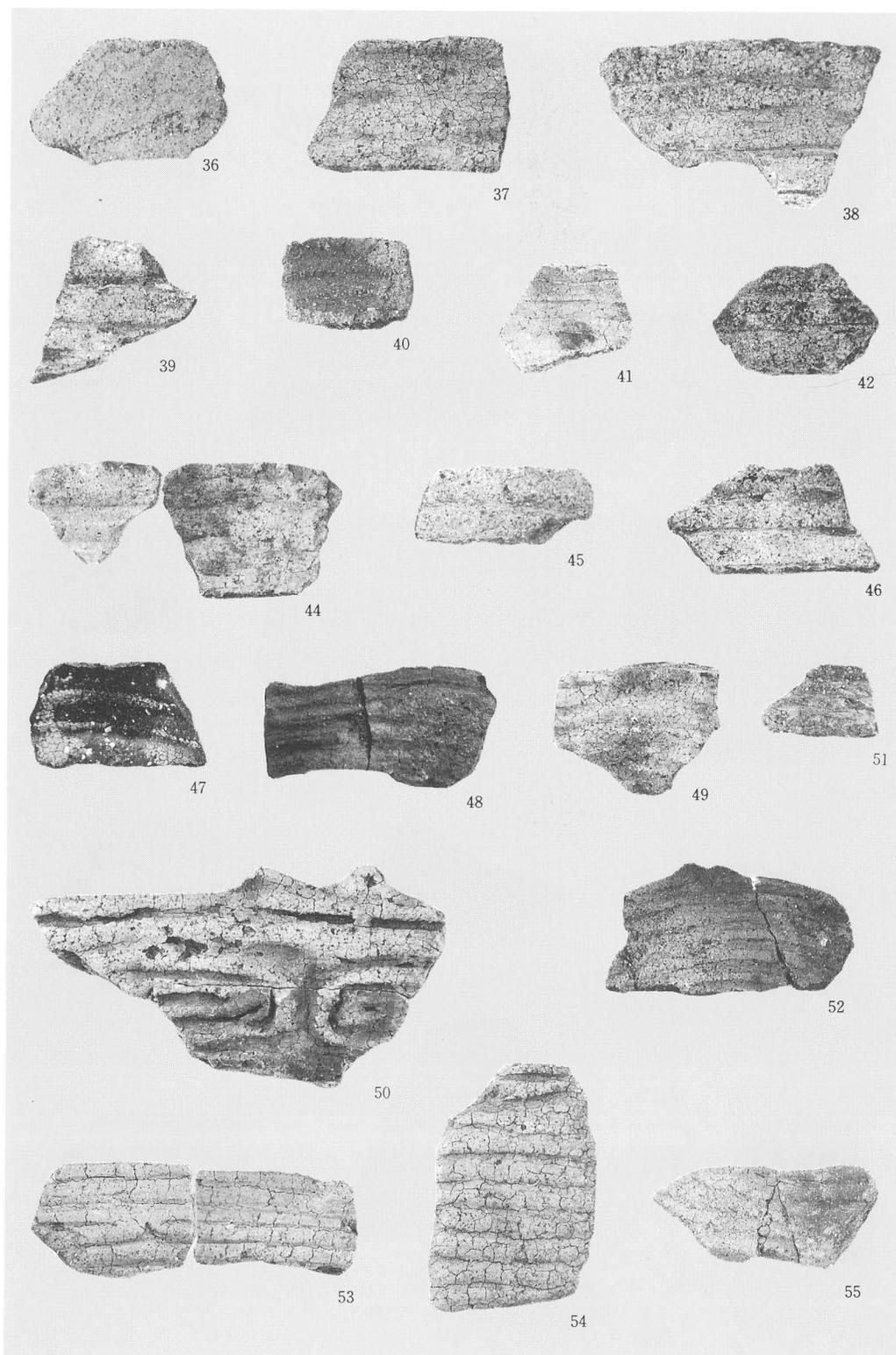


写真13 拓本土器 (3)

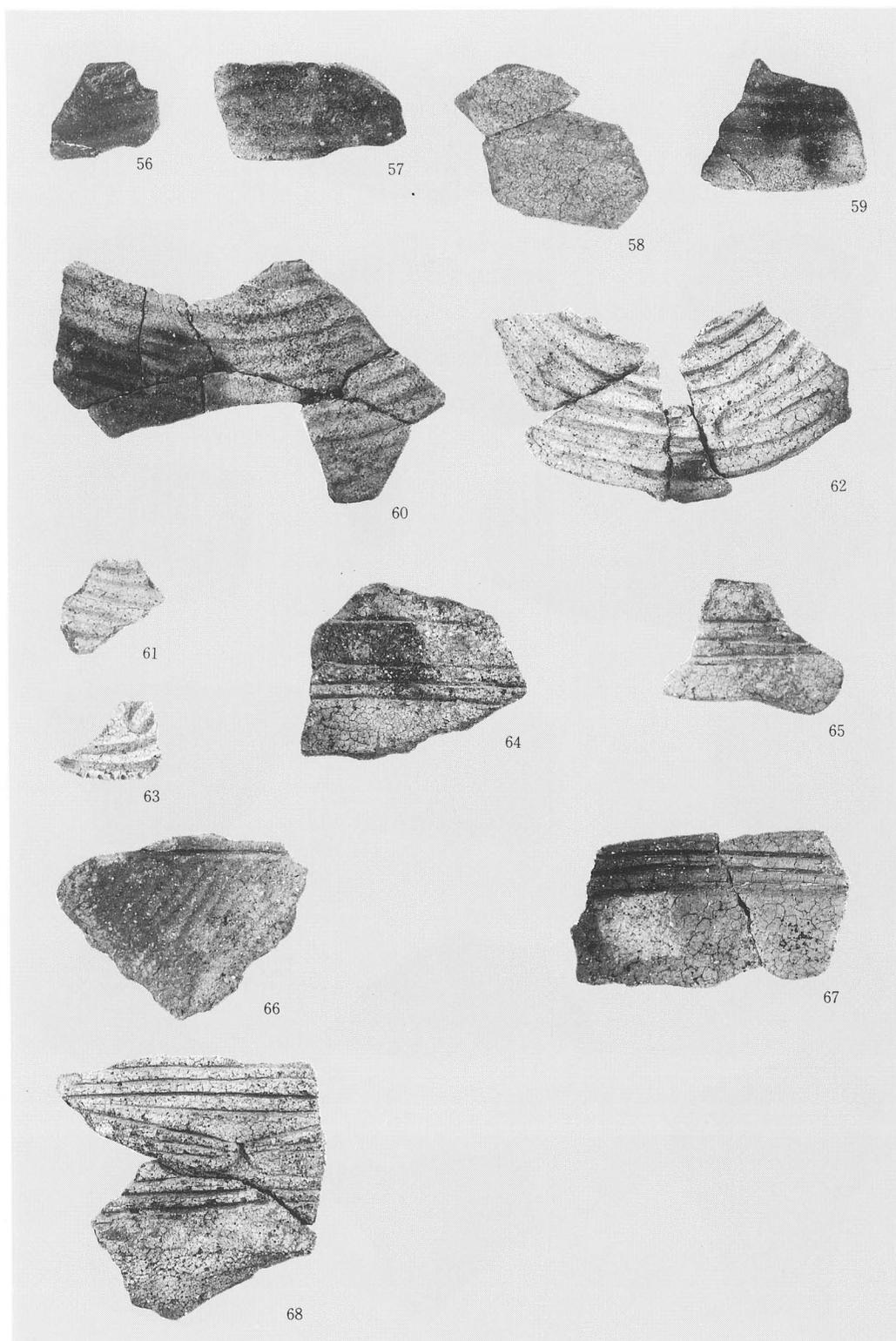


写真14 拓本土器(4)

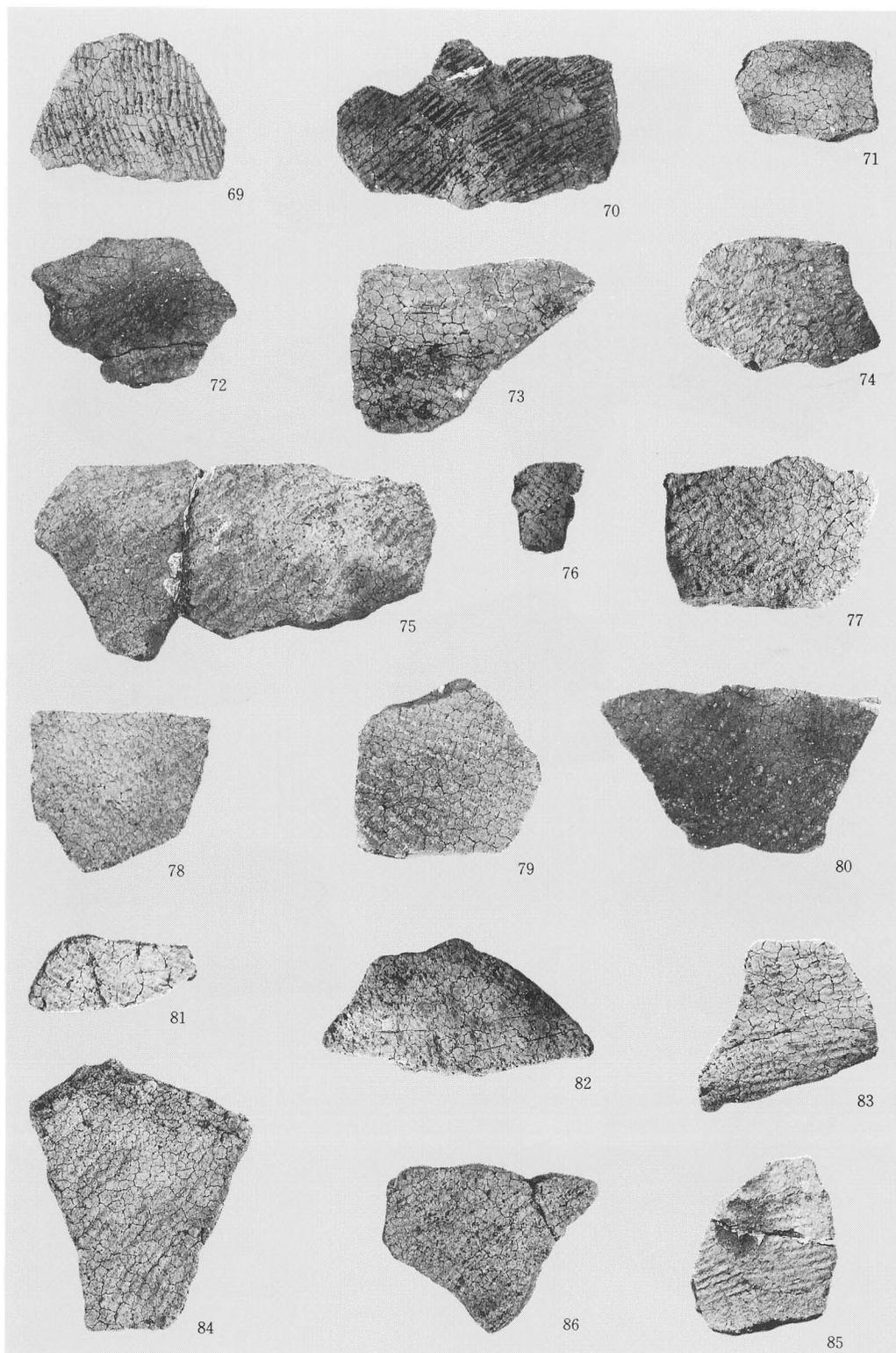


写真15 拓本土器 (5)

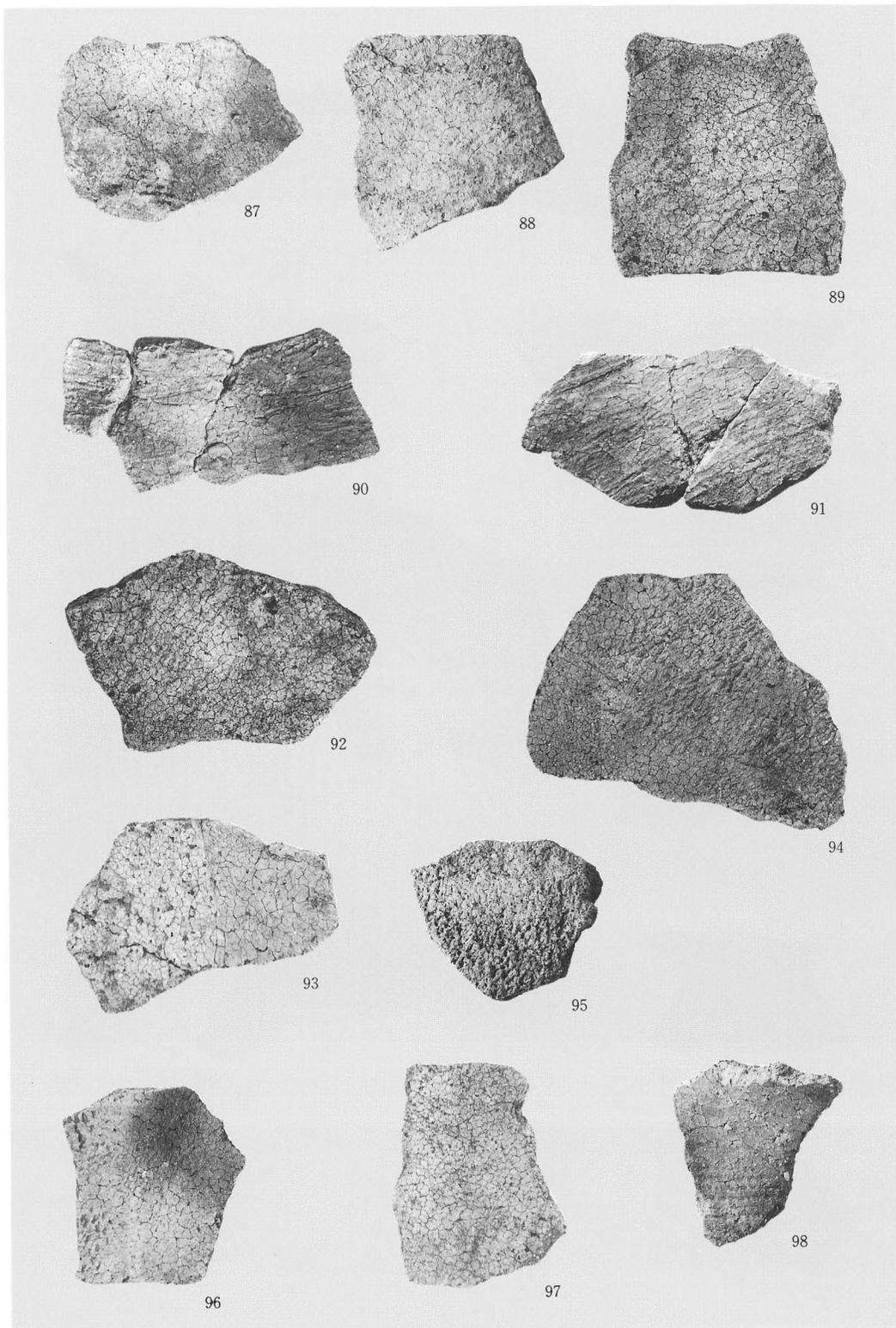


写真16 拓本土器 (6)

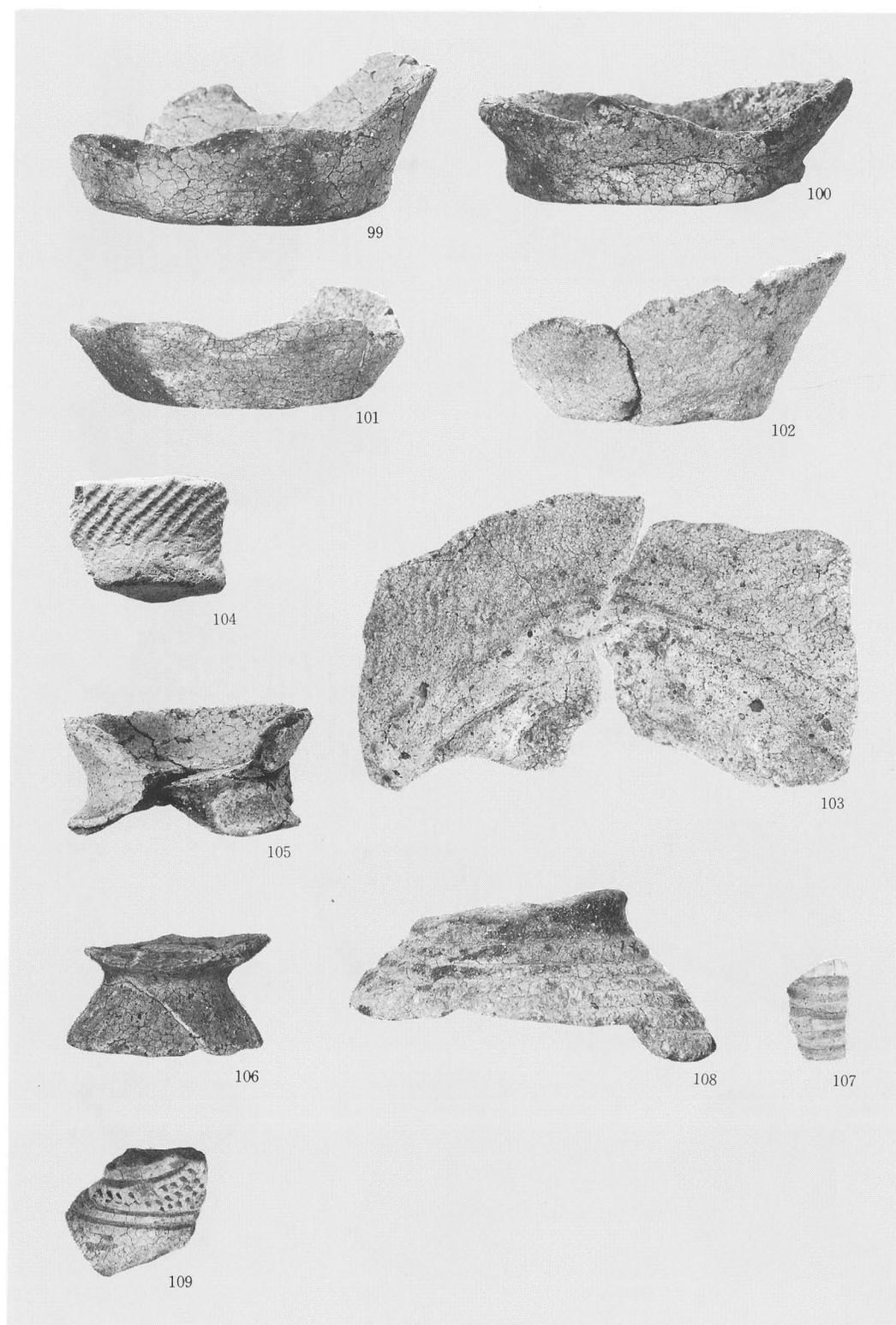


写真17 拓本土器 (7)

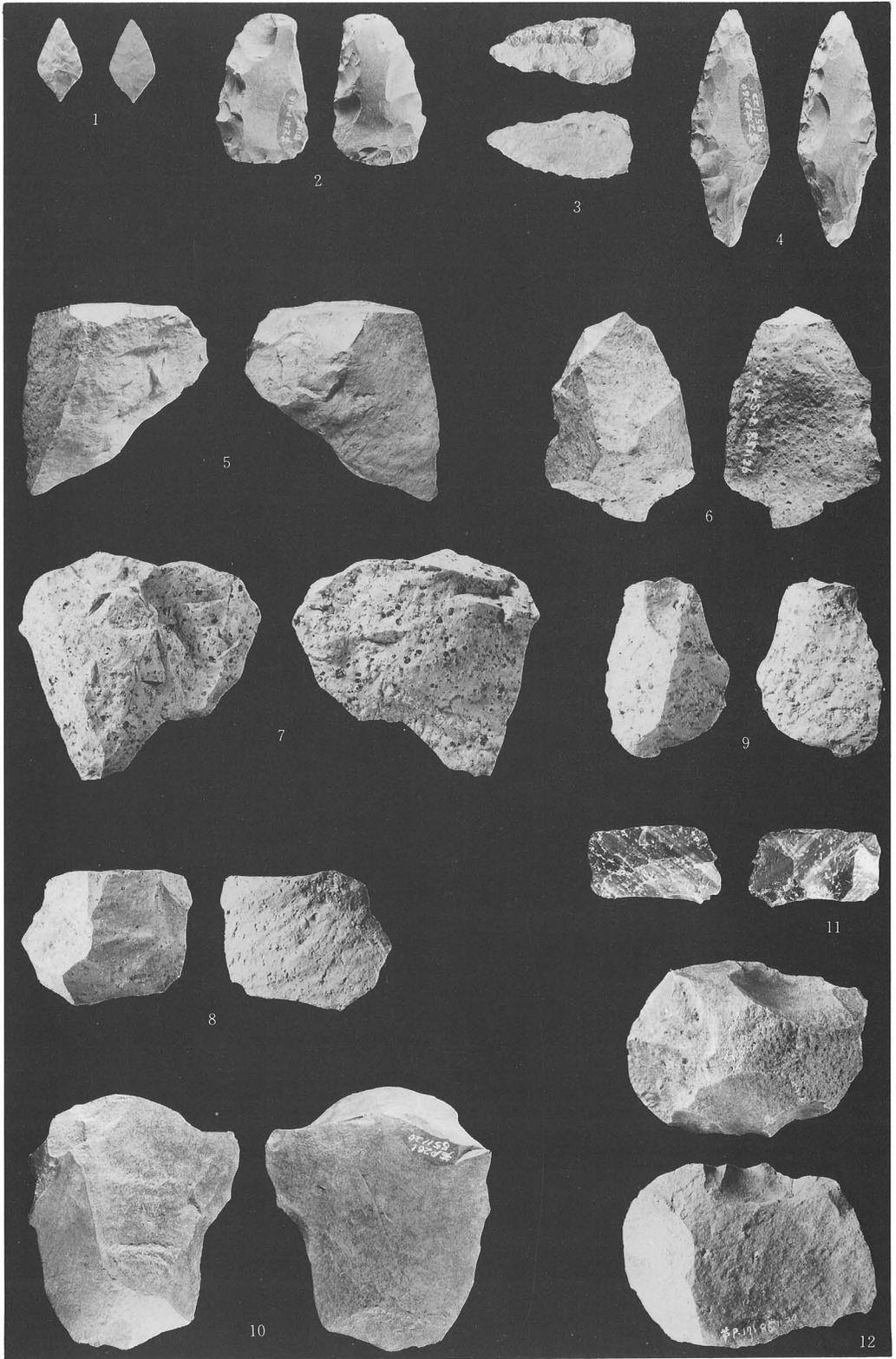


写真18 石 器 (1)

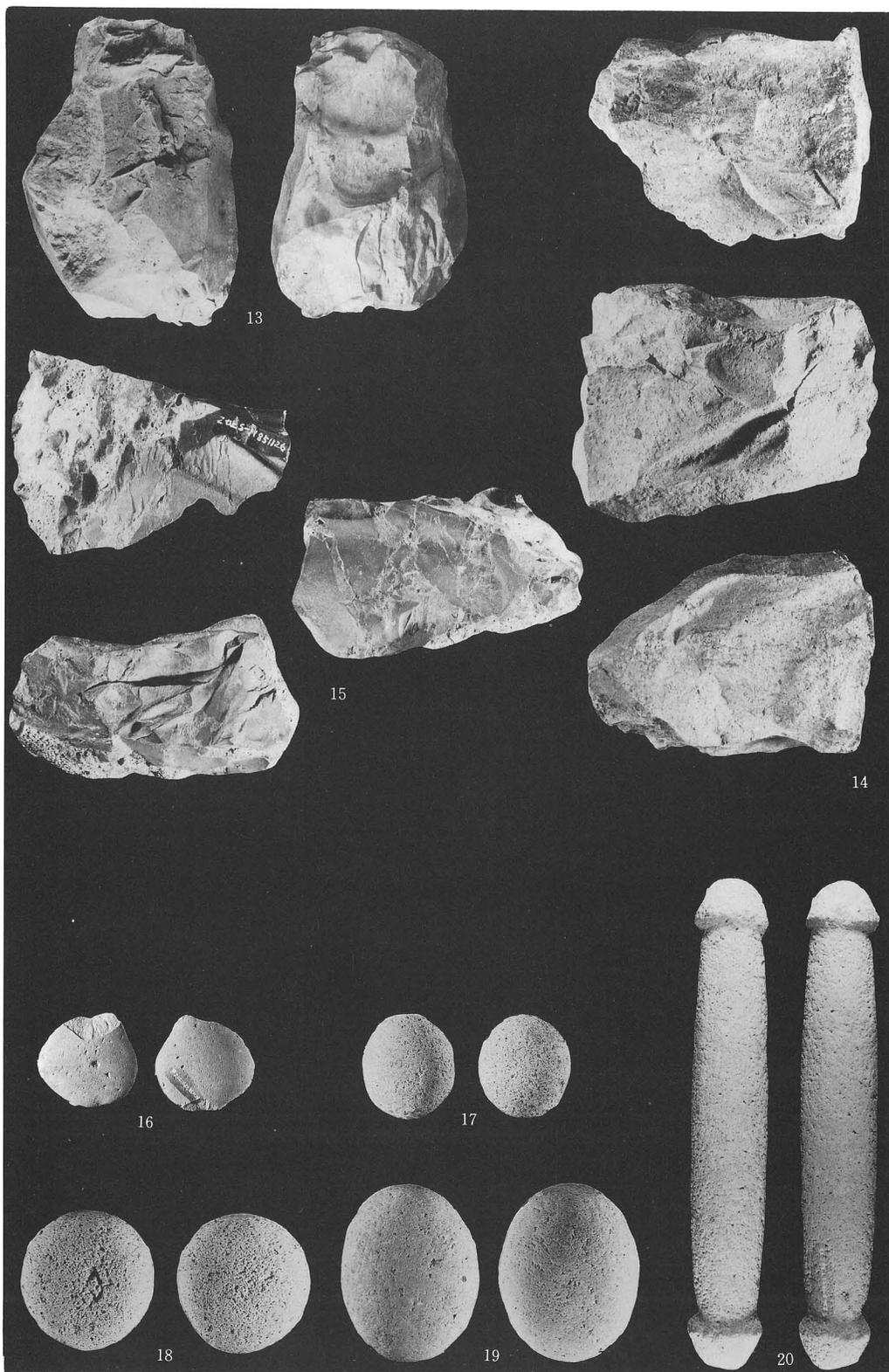


写真19 石 器 (2)

宮城町教育委員会社会教育課職員録（昭和60年度）

教 育 長	田中勝三	社会教育主事	庄子俊夫
教 育 次 長	伊達亮彦	主 事	関本寿恵
社会教育課長	中野 博	主 事 補	工藤信一郎
社会教育課長補佐	田副恒徳	社会教育指導員(嘱託)	沼田幸次郎
社会教育主事(県派遣)	三浦武彦		
主 事	原河英二		

仙台市教育委員会文化財課職員録

文 化 財 課 長	早坂春一								
管 理 係 係 長	成田時雄								
主 任	岩沢克輔								
主 事	白幡靖子	山口 宏							
調 査 係 係 長	佐藤 隆								
主 事	結城慎一	木村浩二	篠原信彦	佐藤 洋	金森安孝	佐藤甲二			
	吉岡恭平	工藤哲司	渡部弘美	主浜光朗	斎野裕彦	長島栄一			
	及川 格	平間亮輔	佐藤 淳	渡部 紀	佐藤良文	中富 洋			
	松本素明	宮崎 明	大江美智代						
主 事	工藤信一郎(市民局宮城総合支所地域振興課併任)								
教 諭	千葉 仁	松本清一	太田昭夫	小川淳一	橋本光一	渡辺雄二			

仙台市文化財調査報告書第120集

谷津A・B遺跡 芦見遺跡

——錦ヶ丘ニュータウン関連遺跡発掘調査報告書——

1988年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株)東北プリント

仙台市立町24-24

TEL 263-1166
